
遊戯王 5 D ' s 転生者です、ごきげんよう

クアンタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう

【Nコード】

N9478X

【作者名】

クアンタ

【あらすじ】

テンプレによって遊戯王5D'sの世界に転生することになった瀬川遊奈。彼女は大好きな遊戯王の世界で、新たに得たデッキとともに波乱の人生を送る。

彼女が駆け抜ける先には何があるのか。
それはまだ誰にも分からない。

この作品は転生オリ主、オリカ、原作再構成ものです。苦手な方はブラウザバックしてください。

そして作者のクアンタはあらずし詐欺を多用します。
次回予告詐欺の常習犯でもあるので、ご注意ください。

プロローグ（前書き）

はい悪びれもせず連載があるのにまたやりました。
クアンタです、ごきげんよう。

あらすじを見ていただいたら分かるとおり、本作は遊戯王5D,
S
の二次創作であり、かつ私TRUEEEEEを目指した作品です。

そのあたりをご理解していただいて上で言います。

ゆっくりしていいね！

ブログ

ふと気がつけば、そこは真っ白な空間だった。

いやいやねーよ。

ついこんな考えに至った私は悪くはないはずだ。
それもそうだろう。

たとえ理解力がある人でも、いきなりこんなところに連れてこられて何がどうなったかなんて分かるはずがない。

……いや別にナニじゃないけども。

さて、現実逃避はやめて目の前のリアルを直視しますか。

「そろそろ頭上げてもらえます？」

「いやしかし、これは私の過失であるからして、誠意を見せねばなりませんのでご理解下さい」

ああ、つまりはきちんと謝ってんだから許してよ、ということなのだろう。

私としても墮落しきったフリーター生活を終えられるなら、こんな形であっても構わないんだけどね。

というかこの状況はあれだろう。

生前（この表現がしっくり来た）によく読んでいた二次小説にはよくあった展開だ。

つまりテンプレだ。

まさかリアルで遭遇するとは、思いもしなかった。
現実逃避したつもりがまさか真実を見ていたとは、私もなかなかやるわね。

さて自己紹介といきましょうか。

私の名前は瀬川遊奈^{せがわ ゆうな}。

遊戯王が好きなただのフリーターよ。

アニメは見えないのだけでもね。

容姿は、まあ自信はあると思うわ。

デュエルの腕も、友達の中では一番だったし。

……そろそろ受け入れましょうか、リアルを。

「えーと、一つ聞きたいんだけど」

「どうぞ」

「テンプレ？」

「ええテンプレです」

当たって欲しくなかったけど、まさか当たるとはね。

「事情を理解してらっしゃるということは、このあともお分かりですね？」

ああはいはい特典ね。転生特典。

基本的にはだいたい三つくらいから五つくらいだったかしら。

てか行く場所を決められるなら遊戯王の世界に行きたいな。

あそこってデュエルだけでも生きていけるんでしょ？

だったら私にとってこれ以上最適な世界もないわね！

「行きたい世界は遊戯王ですね。受領いたしました」

えっ。心を読ま・・・ああ、テンプレね。

心を読まれることすらすでにテンプレで片付けられるなんて、便利な世の中になったわ。

次は特典かしら。

「ええそうです。四つまでなら叶えられます。そして私はミカエルです」

えっ。ミカエルとかテンプレじゃないじゃん。

てか天使長に頭下げさせるとか。私、外道じゃん。

あれ、なんか忘れてるような・・・ああ、特典ね。

「えっとー。じゃあオリカで構成されたデッキを三つ、自分で作れ

るようにしたいんだけど」

「その場合は三つ分の消費となりますが、いいですね？」

あーうー。ちよつとしょっぱいな。

でもまあオリ力創れるんだし。対等な対価かな。

「あと遊戯王の世界って、やたらと主人公サイドが特別な仕様なんですよね？」

「ええ。カードゲームもこのような仕様となるなんて、誰もが予想できなかったでしょうね」

そりゃそうだ。

どこの世界にカードで世界を救うなんてあほなことが起こるのだろうか。

……私が今から行く世界か。

んー、特別な力が必要なら、私も貰ったところかな。

原作介入じゃなくて、自衛？

だって私、遊戯王のアニメ見てないし。

仕事してたし、部活やってたし。

「あとの二つはどうしますか？」

「そうですね。一つは主人公たちに負けない程度の特別な力を下さ

い。もう一つは、んー、何にしようかな？ 残りは、まあまあな資金を下さい」

「随分と現実的な要求ですね。ですが私は嫌いではありませんよ、そういうのは……ですが、ドロー運などは要求しないのですか？」

それは当然でしょ。
だって、それは、

「自分自身がデッキの中に眠るキーカードを引き当てた時のあの満足感と興奮は、そんなまがい物では味わえないものなのよ。私は、それをどこでも感じただけなの」

そう、あの感覚だけは、同じデュエリストなら共感できるはずだ。

「……分かりました。そろそろ特典の受領も完了します。そしてあなたをかの世界に送る準備も完了しています。ここから送られるのも時間の問題です」

「そうですか。ありがとございます。ところで一つ聞きたいんですけど」

「何です？」

今まで気になっていたこと。それは、

「私の死因ってなんですか？」

ぶっちゃけ気になるのもしかたがないだろう。
初めての経験なのだから。

「ああ、それはですね。転落事故です」

転落事故？

どういうこと？

「あなたが死んだ時に歩いていた歩道橋は罅がありまして、それを補修したのはいいのですが、あなたが歩いていた場所にバグが発生してですね。あとはおそらくご想像通りです」

なーる。それならまあいいか。

ぶっちゃけ言っと、むしろ社会にさほど影響をなさない私が死んでいて助かった。

これがこの時死んだのが著名人なら大騒ぎだったろう。

「あなたは淡泊な人ですね」

「生まれつきです」

あ。体が透けてきた。

そろそろ世界を渡る時が来たんだ。

「じ」・・・運・・・」

なんて言ったかは聞き取れなかったけど、きっと激励してくれたんだろうな。

頑張らないとね。

プロローグ（後書き）

さてさっそく続きを執筆DA！

よろしければ拙作の別作品も見てくださいね。

遊奈「宣伝とか・・・ないわ・・・」

まあそう言っなって

次回 『サテライトの姫』

次回まで、ごきげんよう

一話『サテライトの姫 瀬川遊奈』

みなさん、どうもこんにちわ。

瀬川遊奈です。

あの白い空間から旅立って、早七年です。
十歳です。早いですね。

え？

なんでこんな投げやりかって？

それについてはですね、私が幼女化していたからよ！
気が付いたらだいたい三歳くらいのベビーボデーになってて驚いた
わ。

でもまあよくある授乳プレイとか経験しなかっただけマシね。

そうそう今私がいる現在地んだけどね、どうやら私サテライトつ
てとこにいるみたい。

簡単に言つと廃棄物リサイクル施設ね。

なんか出来て間もないみたいだけど。

きつと気のせいね。

そうだ、白い空間で思い出したけど、まだオリカは創ってないわ。
起きたら横にKC製のデュエルディスクと、ディスクにセットされ
てた生前の私のデッキがあったから、今はそれでいてるわ。

他のカードが欲しいなって思ったら、近くにカードが落ちてたりす
るしね。

そういえばその時に一緒にカードを拾う子がいて、その子とも仲良
くなつたわ。

名前は不動遊星っていったかな。
蟹みたいな髪の毛が印象的だったなあ。

カードが揃ったらデュエルしようって約束したけども、あいにくと
遊星がどこに住んでるかなんて聞いたことないし。
まあまたいつか会えるよね。

それよりも最近、困ってることがあるのよね。
それは・・・

「姫ー！ 今日の飯、取ってきやした！」

「姫！ 俺はレアカード拾ってきやした！」

「姫！ わしゃあ使えそうな家具を拾ってきやしたぜ！」

「姫！」「姫ー！」「ひーめー！」

「ああもう、うつるさいな！ 私の家に大人数で入ってくるなー
ーーーー！！！」

舍弟といいますが、家来といいますが。
とにかくそんな人たちが大量に来るんですよ。
尊敬に染まっただけなら目を輝かせながら・・・orz。

なにがいったいどうなってこうなったか、みなさんに教えましょう
かね。

あれは、まあ数ヶ月くらい前です。

神様補正か知りませんが、無法者が集うこのサテライトでも私はすくすく育ってたわ。

けっこう住みやすそうな場所も見つけました。

それから数日後のことね。

私の住処に、住人ちかくのデュエルギャングがやってきました。彼らはそこにいた私に向かって、開口一番こう言ったのよ。

「ここは今日から俺達のアジトだ。慰み者になりたくなかったらとつとと失せな」

と。

とりあえずむかついた私は彼らに向かって言い返したわ。

「そっいうのは実力で決めるのよ、このロリコンどもめがつ！」

ええ、バックベアード様ですね、わかります。

それにキレて、幼女（私）にデュエルをしかけてきた彼らですが、まあ今の彼らの実態をしったなら想像するのも容易いでしょうね。

ええ、フルボツコしました（ドヤア

といっても仕方ないと思いますけどね。

こんな環境で手に入るカードなんて知れてますし、いい感じのカードなら私と遊星と一緒にいた子供達ジャックとクロウっていったかながあらかた回収しましたからね

（ドヤア

そんなわけで彼らは基本、それなりのバニラしか使いませんし、魔法・罠カードもほとんどありません。

そんな状況で、いいカードをそろえた私と戦っても、十中八九負けるでしょうね。

まあ？

心優しい私は、彼らを許して帰らせたのですが・・・。

・・・その結果がこれだよ。

笑いなさいよ。

あれが彼らにとっては始めての優しさだったそうで、今ではもうすっかり姫、姫と。

調子に乗った報いですかね。

それにしても最近面白いことがないな。

遊星も私と話すときは顔を見ないし。

ジャックはキングごっこしてるし。

クロウは子供の世話ばかり。このロリシヨタコンめが！

ごめん嘘。だからゲイル投げようとししないで。

「おーい、変態ども。なんか面白いことないー？」

「姫、それならここにけっこう強いガキがいるって噂ですぜ。
あと変態じゃねーです」

「案内なさい、変態」

「もちろんでさ！ あと変態じゃねーです」

ほんと、こいつらの返しは面白いわ。

ていうかサテライトで、遊星、ジャック、クロウ。
聞いたことあるわね。原作キャラだっけ？

ていうかもう一人、サテライト関連で誰かいたような。
友達にMAD見せてもらった時に見ただけど・・・。
うがー！ 思い出せない！
もういい！ 会ったら思い出すでしょ！

一話『サテライトの姫 瀬川遊奈』（後書き）

次回からようやくデュエルです。

みなさんは、お分かりでしょうが、次回に出るのはあの人です。
みんな大好きですからね。

遊奈「誰よ？」

あなたも会えば分かるよ。

次回『満足少年』

それでは次回までごきげんよう

二話『満足少年の憂鬱 レッツ・サティスファクション!』

さあゝて、来週の『遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう』は？

遊奈です。

今日はサテライトの中でも海沿いのところにやってきました。

変態たちがデュエルが強いという少年がいるというので、ついてきたらそこにいたのはMADで腹筋がお世話になったあの人だったんです。

私のデュエルディスクを見るなりデュエルを開始しようとする彼。私はどうすれば・・・?!

来週の『遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう』は

遊奈のデュエツ!

満足、私は満族

サティスファクション

の三本で送りいたします。

それでは来週まで。

じゃん、けん、ぽん!

うふふふ。

「ふっざけんな、この変態ども—————!!」

「ひ、姫がご乱心だ—————!!」

「クリスティアは、どうかクリスティアは勘弁を—————!!」

「なんまんだなんまんだ」

「なんなんだよ、こいつら」

水色の髪の毛の少年がぼやいてるが、今は彼に構っている暇はない。
というかその彼が問題なのだ。

だって彼の名前は、鬼柳京介。
5D'sで一番の知名度といっても過言ではないはずだ………
たぶん。

彼を有名たらしめるその要因とは、すなわち満足だ。
いや何を言ってるのとかじゃなくて、まじで満足だ。
これ以外にいいようがない。

MADのおもとして重宝され、その人気っぷりはとどまるところ
を知らず、全国に満族という固定のファンを作るほどだ。

私もMADで見た程度のにわかだが、彼は素晴らしい。いや腹筋ク
ラッシャーだが、同時に涙腺クラッシャーの彼も知る私としては、
あんな結末にはしたくないな。

彼を見た瞬間、私はだいたい忘れていた塵ほどの原作知識を思い出
した。

遊星、ジャック、クロウってもろにメインキャラですやん。私エ……

「おい、お前ら。俺とデュエルしてきたんじゃねえのかよ？」

「そうだったわね。じゃあボコボコにして、満足してやるわ」

「満足？ いい言葉だな。なら俺もお前を倒して満足してやる」

あれ？

この頃つてもしかして、まだ無満足期？

満足つてそもそも知らなかったの？

えー。じゃあ私、変なことしちゃったよ。

でもまあいっかな。

デュエルするだけだし。

「始めようか」

「おう、行くぜ」

「「^{デュエル}決闘！」」

遊奈

LP4000

手札5

鬼柳

LP 4000

手札 5

「先攻、俺のターン！」

手札 5 ↓ 6

「なにが来るのかな」

「俺はブラッド・ヴォルスを攻撃表示で召喚」

ブラッド・ヴォルス

ATK 1900

うわあ、ソリッド・ヴィジョンってやっぱりパナいわね。
かっこいいなー。

そいえば、カードって言わないね。

あれはダークシグナーの時だけなのかな？

まあいいや。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

鬼柳

場

ブラッド・ヴォルス（攻撃表示）

伏せカード一枚

今さらだけど、よくブラッド・ヴォルスなんて見つけたね。
なかなか見なかったのに。それもジャックに取られちゃったし。
別にいらないけどね。

「私のターン、ドロー」

手札5↓6

これは……この手札はすごいわね。

「速攻魔法発動！ サイクロン！」

「ちっ、ヘイト・バスターがっ」

「そして手札の神秘の代行者アースを除外して、マスター・ヒュペ
リオンを特殊召喚！」

マスター・ヒュペリオン

ATK2700

まだ終わらないよ。

「手札からヘカテリスの効果発動。デッキから、神の居城―ヴァルハラを手札に加える」

「そいつは自分のフィールドにモンスターがいる時は発動できなかったんじゃないか？」

「いやこれでいいよ。私が欲しかったのはコストだからね」

「何・・・だと・・・？」

いやこつちがそれだし。

なぜそのネタを知っているし。

でもなんか弄りやすそうだな。

まっ、今はデュエルに集中ってね。

「墓地のヘカテリスを除外し、マスター・ヒュペリオンの効果発動。あなたのブラッド・ヴォルスを破壊するわ！」

「ちいつ！」

「まだ終わってないよ。私は奇跡の代行者ジュピターを通常召喚！」

奇跡の代行者ジュピター

ATK1800

「これで攻撃力の合計は4500。あなたはライフはゼロだよ！」

「ワンキルだと！」

「いっけーーーーー!!」

私の2体のモンスターから放たれた二つの光が、彼を包み込んだ。

ソリッド・ヴィジョンって衝撃はあるんだね。

彼………っていうか鬼柳くんが軽く吹っ飛ばされちゃったよ。

「おーい、大丈夫？」

「おう、それにしてもお前強いな。俺は鬼柳京介だ。お前の名前はなんつうんだ？」

知ってます。なんて言ったら変だし、素直に初対面のふりしところ。

「私は瀬川遊奈。私のことは気軽に遊奈と呼んで。私も京介って呼ぶから」

「ああ、これからもよろしくな遊奈」

その時、私は確信した。

彼はとんでもなく面白いことをしでかす、と。

これが後にサテライトの伝説となるチームサティスファクションのリーダー鬼柳京介と、サテライトの姫と呼ばれる瀬川遊奈の邂逅だった。

二話『満足少年の憂鬱 レッツ・サティスファクション!』（後書き）

今回使ったデッキは、今の環境で活躍中の代行天使ですね。

知人がストラクチャーデッキ買ってそのまま大会出たら、まさかのベスト4進出とかいうふざけたことをしでかしたデッキです。

てか効果みるだけでこんな風に動くんじゃないかね、と理解できるほどのシンプルさ。故に強力。

いや色んな動かし方があるとは思ってますけどね。

TG代行とか、色々種類もあるみたいですね。

本編のほうですが、鬼柳さんとのフラグと思えそうな地の文入れましたが、カップリング成立させるのは蟹さんです。

あとジャックとカーリーです。

鬼柳さんはなぜか、横にいる女性がまったく思い浮かばない。なぜだ。

まあ鬼柳さんが満足してくださるなら、我々満族も無問題なんだからNE!

遊奈「今回の後書き、長すぎじゃない?」

まあまあいいじゃん。

遊奈「前もそれで流された気がするけども、まあいいわ。それで次回は?」

ああ次回はまた時間が飛びます。
アニメ本編開始まで。

遊奈「早。でもまあそうじゃないと暇だしね」

お前は遊星と遊んでろ。

遊奈「だって最近、遊星つてば私の顔見ないもん」

これだから鈍感は。

よし、リア充は無視して次回予告だ。

次回『サテライトの赤き二つの流星』

それではみなさん、次回まで

遊奈「次回までごきげんよう」

取られたっ・・・・・・・・!?

三話『サテライトの赤き二条の流星』（前書き）

どうも、クアンタです。

今回はようやくオリカ登場です。

そのオリカですが、まあ、ちょっとやっちゃった感があるので突っ込みはご遠慮ください。

三話『サテライトの赤き二条の流星』

京介との出会いから八年。あれから色んなことが起きた。その中でも忘れられないことが、二つある。

それはチームサティスファクションのサテライト統一と、京介の逮捕だ。

大切な仲間がセキュリティに連行されてしまった。

それに同じサティスファクションのメンバーである彼らが関わっていたことが、京介を絶望させた。

連行されていく一部始終を見ていたが、あの時の京介の表情は忘れられない。

その時自分自身に抱いた無力感と、屈辱も。

友を救えないなんて、いや私は自分の保身に走ったのだ。

今更どうこう言う資格などないのだ。

とにかく、あの一件からメンバーと私たちのメンバーの間では、あの事件はタブーになった。

そう言えば二年前にジャックがシティに渡ったと遊星から聞いたけど、もしかして本当にキングになったのかな。

私の住処は電波が悪くてテレビが映らないからね。

「姫ー。そろそろ遊星さんのアジトに向かうんじゃないんですかー？」

「そうだったわね。私のD、ホイールはどうなっているの？」

「完璧に調整が完了してますぜ、姫！」

「そう。なら、大至急向かうわ！　あなた達はいつでも来なさい！」

「……姫がおられるところに俺らアリでさあ！　いつでも見守ってますぜ、姫！」「……」

ああもう本当に、この変態どもはどうにかしてしまえないかね。そう思ってるのに、笑えちゃうわ。

あいつらってほんとに、一緒にいて楽しいもの。

ガレージについてみれば、そこに鎮座しているのはアジトの主たる私の足、D ホイール。

その名もスカイ・フライヤー。

赤いボディは遊星のD ホイール、遊星号と同じだった。

名前の由来は風を切る感覚が、空を飛んでるようだったからそう名づけた。

遊星も笑顔でいい名前だって褒めてくれたし、あの時は嬉しかったな。

なんでかは分かんないけど。

ヘルメットを被り、ハンドルを下ろす。
エンジンを作動させる。

私のD ホイールは一般的なバイク型だ。
だからこそデザインも豊富で人気も高い。

でも私にはそれはあまり関係ない。

この甲高い回転音さえ聞けたならそれで満足できる。

それくらい私はD、ホイールを、スカイ・フライヤーを愛している。

この風が後ろから追いかけてくるような感覚は、本当に最高だ。

「やつほー、遊びに来たよー」

「お、遊奈じゃん」

「なに・・・！」

「相変わらず、遊星は遊奈と聞くとすぐにそっちに向かうな」

「そりゃそうだろう、だって遊星は・・・」

「お前達！」

「はいはい、黙ってるよ」

なんか言い合ってるけど、どういうことだろ？

あ、ブリッツがため息ついてる。

なんか嫌なことでもあったのかな？

「遊奈。今日という今日こそは、俺とデュエルしてもらおうか」

「そうだね。私もやっと思つてたデッキが完成したんだ」

そう。待ちに待ったオリカデッキ。

あーでもない、こーでもないと言を捻つて完成させたこのデッキで、遊星をばこぼこに……。

『あー、あー。聞こえているか、ラリー・ドーソン。お前の居場所はずでに割れている。大人しく出てきて我々に連行される』

あ、あれつてセキュリティの追跡ヘリじゃん。

てかまたラリーは盗んだのか。

今度は何を盗んだのよ。

「ラリー！ やっぱりの部品は盗品だったんだな！」

「ご、ごめんよ。でも遊星が今作ってるD、ホイールは俺たちの希望だろ！？ だから早く完成してほしかったんだ！」

いくらなんでも行動力ありすぎでしょ。

それよりもD、ホイールの部品つてそう簡単に盗めるものなの？

「だからつてなあ……」

「もうそれくらいでいいだろう。これ以上俺達で争っても仕方がない。お前達は逃げろ」

「遊星はどうするんだよ？」

「俺が・・・」

「俺が囷になる、でしょ？ 私も手伝うわよ？」

そんな面白そうなこと、この私が見逃すわけないでしょうが！

「だが・・・」

「あーもう。そんな顔しないの。私の強さは知ってるでしょ？」

「実際にデュエルしたことはないんだが」

あはは、そっぴやそうだっけ。

まあいいや。

ライディングデュエルは滅多に出来ないんだけど、面白いし、それにけっこう向いてると思うから大丈夫でしょ。

「遊星はそっちら。私はこっちから行くよ」

「・・・分かった。無事で帰ってくるんだぞ」

「りょーかい。じゃあ私のアジトでね」

「ああ」

さーて行きましょうか。

飛び乗るようにしてD ホイールにまたがり、ヘルメットを被って勢い良くペダルを踏みこむ。

Gに押されてシートに押し付けられるこの感覚は、やはり最高だ。

地上に続く坂から勢い良く飛び出る。

十数メートルほど飛んだあとに、着地して後ろを見る。

パトカーが一台に、D ホイールが二台。

あ、一台がこっちに向かってきた。

これは好都合。

タイムンでいけるじゃん！

「む？　なんだ、貴様マーカー持ちではないのか・・・囹になったか、取り残されたか？」

「さあ？　どっちでしょう」

「ふん。貴様に構っている暇などないが、貴様もD ホイールに乗っているのなら出来るのだろう？」

「もちろん。返り討ちにしてやるけど？」

「ほざけ。そうだな、私が勝ったら貴様のデッキと、そのD・ホイールは没収だ。永遠に帰っては来ないぞ」

そっちがその気なら、こっちだってなにか条件がないと割に合わないわ。

この世は全て、対価がないと駄目だからね。

「だったら私が勝ったら、今回の件には目を瞑ってもらおうかしら？」

「ふん、いいだろう。ただし、勝てたらの話だな」

「上等！」

フィールド魔法、『スピード・ワールド』セット。
オート・パイロットは・・・なし！

「貴様、オート・パイロットなしだと！？」

「当然！ 機械任せなんて、してられないわ！」

スタンバイ、完了。
もう準備は完璧ね。

あとは宣言だけ！

「さあ、行くわよ」

「ふん。始めようか」

「^{デュエル}決闘！！」

遊奈

LP 4000

手札 5

Spco

セキュリティ

LP 4000

手札 5

Spco

「先攻は私が貰う、ドロー！」

セキュリティ

手札 5 ↓ 6

「私はゲート・ブロッカーを守備表示で召喚。ターンエンドだ」

セキュリティ

手札6 ↓ 5

ゲート・ブロッカー

DEF 2000

うわ、ゲート・ブロッカーだ。

あれって結構ひどいのよね。

守備力は高いわ、s p cは増えないわで厄介なのよね。

でもあれを乗り越えてこそなんだけど。

「私はG N、ガンダムデュナメス深緑の狙撃兵を攻撃表示で召喚」

遊奈

手札6 ↓ 5

G N、深緑の狙撃兵

ATK 1600

セキュリティ

S p c 0 ↓ 1

うん、分かってるから。

何も言わないで。

これは少し趣味が行き過ぎただけなの。悪ふざけじゃないの。けっして作者がOO好きなだけっていうわけじゃないの。

きちんと私も好きよ？

だからやっちゃったんだけど・・・。
まあいい子だつてことを見せれば納得するわよね？
強さ的な意味で。

「私はカードを一枚伏せて、ターンを終了するわ」

遊奈

手札5↓4

「私のターン、ドロー！」

遊奈

S p c 0

セキュリティ

手札5↓6

S p c 1↓2

「（・・・これは勝ったな）・・・私は手札のアサルト・ガンドッグ、華麗なる潜入工作員、ガード・ドッグを墓地に送り、モニタージュ・ドラゴンを特殊召喚する！ モンタージュ・ドラゴンの攻撃力は、この時墓地に送ったモンスターのレベル×300ポイントの数値になる！」

セキュリティ

手札6 ↓ 2

モンタージユ・ドラゴン

ATK3000

うっわ。

これはひどい。

・・・手札が半分くらい事故ってるのに、どうしろって言うのよ、この状況を。

いや、これをひっくり返すことが出来たら、最高なんだけどさ。

「モンタージユ・ドラゴンで、貴様のモンスターに攻撃！ パワー・コラージユ！」

「くっ、リバースカード、オープン！ 和睦の使者！ このターン、私のモンスターは戦闘では破壊されず、戦闘で受けるダメージも0になる！」

「ちっ。カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

セキュリティ

手札2 ↓ 1

ここであの子が来なかったら、ぶっちゃけ終わったわね。

さて来てくれることを祈っておこうかな。

「私のターン・・・ドロー！」

遊奈

手札 4 ↓ 5

S p c 0

セキュリティ

S p c 2 ↓ 3

あの子が来てくれることを信じて、思い切りドローする。
振りぬいた手に掴んでいるカードを見ると・・・。

来た！

「私は G N、ガンダムエクシア 蒼穹の粒機兵を攻撃表示で召喚！」

遊奈

手札 5 ↓ 4

G N、蒼穹の粒機兵

A T K 1 9 0 0

「そして自分フィールド上に G N と名のついたモンスターが存在することにより、オーガンダム G N、原初の粒機兵を特殊召喚する！」

遊奈

手札4 ↓ 3

G N、原初の粒機兵

ATK 1000

この二体が、私のエースを呼んでくれる！

「二つの想いが束ねられた時、新たな剣が舞い降りる！ コンタクト融合！ 来て、G N、ダブルオーガンダム蒼穹の双粒機兵！！」

G N、蒼穹の双粒機兵

ATK 2400

・・・かつこいいなあ。

すごいね、これが生ダブルオーか！。私G J、超G J。
ソリッドビジョンもいい味だしてるね。

・・・ちよつと舞い上がってたわね。

さて、何もしなかったところを見るに、あの伏せカードは攻撃反応型かな？

それはそれで好都合だわ。

「G N、深緑の狙撃兵の効果発動！ 自分フィールド上にこのカード以外のG Nと名のついたモンスターが存在する場合、相手の魔法・罠カードを一枚破壊できる！」

「馬鹿な！」

「さらに、GN 蒼穹の双粒機兵の効果を発動！ 手札を一枚墓地に送ることで、相手のカードを一枚破壊できる！ 私が破壊するのは、モニタージュ・ドラゴン！ スプレッド・ライフル」

ダブルオーが放った拡散射撃が、モニタージュ・ドラゴンを吹き飛ばした。

あとはゲート・ブロッカーのみ。

でも若干攻撃力が届かない……。

！！

この方法なら、このターンで終わる！

「私はSp セイム・スピードを発動！ このターン、私のスピードカウンターは、相手のスピードカウンターと同じになる！ そしてエンドフェイズ時に0になる」

遊奈

手札3 ↓ 2

SpCo ↓ 3

これで発動条件はそろった。

最後の効果も、私は元々0だったから関係ないし。

そもそもこのターンで終わらせるから、まったくの無意味だわ。

「さらに私はSp セカンド・チャンスを発動！ 自分のスピードカウンターが2以上ある時、スピードカウンターを全て取り除き、自分のモンスターを一体手札に戻すことで、このターン自分のモンスター一体は二回攻撃できる！」

遊奈

手札2↓1

「なんだと!？」

「私は、デユナメスを手札に戻して、ダブルオーを選択するわ！」

遊奈

手札1↓2

これで準備は万端！

「ダブルオーでゲート・ブロッカーを攻撃！ ツインランス！」

ダブルオーがその手に持った剣——GNソード？で、ゲート・ブロッカーを切り裂いた。
これでもう壁はいない！

「ダブルオーで、ダイレクトアタック！」

「私のライフは残るぞ！」

「いいえ、あなたはこのターンで終わりよ。手札のGN、深緑の狙撃兵の効果を発動！ 自分のGNと名のついたモンスターが戦闘を行う場合、このカードを墓地に送ることで戦闘を行うモンスターの攻撃力は1600ポイントアップする！」

「馬鹿な！？」

遊奈

手札2↓1

GN、蒼穹の双粒機兵

ATK2400↓4000

「いけえ、ダブルオー！ セカンド・ツインランス！」

「ぐおわーーーー！！！」

ダブルオーの二撃目が、セキュリティに直撃した。

彼のモニターには、DEFEATと表示されスリップしながら停止した。

それを横目で見ながら、颯爽と私は離れていく。

とても爽快だった。

やはりライディング・デュエルは楽しい。最高だ。
風を切りながら、勝利するのは快感だ。

そのまま私は、アジトへと戻っていった。
今度は遊星ともデュエルしたいものね。まる。

三話『サテライトの赤き二条の流星』（後書き）

まあ、これはひどいと言えるものですね。
じゃあオリカ紹介でもしましょうか。

GN、蒼穹の粒機兵（ガンダムエクシア）

効果モンスター

レベル4 / 光属性 / 機械族 / 攻撃力1900 / 守備力1200

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えていればその数値だけ相手に戦闘ダメージを与える。

このカードが戦闘で破壊された時、手札またはデッキから「GN - エクシアリベア 粒機兵の残骸」を特殊召喚する。

GN、深緑の狙撃兵（ガンダムデュナメス）

レベル4 / 光属性 / 機械族 / 攻撃力1600 / 守備力1000

効果モンスター

自分フィールド上にこのカード以外の「GN」と名のついたモンスターが存在する場合、一ターンに一度だけ相手の魔法・罠カードを一枚破壊できる。

自分の「GN」と名のついたモンスターが戦闘を行う場合、このカードを手札から墓地に送ることと戦闘を行うモンスターの攻撃力を1600ポイントアップする。

GN、原初の粒機兵（オーガンダム）

レベル2 / 光属性 / 機械族 / 攻撃力1000 / 守備力800

チューナー（効果モンスター）

自分フィールド上に「GN」と名のついたモンスターが二体以上存

在する場合、このカードは特殊召喚することができる。
このカードはターンに一度まで、戦闘では破壊されない。

GN 蒼穹の双粒機兵（ダブルオーガンダム）
レベル6 / 光属性 / 機械族 / 攻撃力2400 / 守備力2000
融合・効果モンスター

「GN 蒼穹の粒機兵」+「GN 原初の粒機兵」
このカードは自分フィールド上に存在する上記のカードをデッキに戻すことで、エクストラデッキから特殊召喚することが可能（「融合」魔法カードは必要としない）。
手札のカードを一枚墓地に送ることで、相手フィールド上のカードを一枚破壊することができる。

Sp セイム・スピード
通常魔法

このカードを発動したターン、自分のスピードカウンターは相手と同じになる。
このカードを発動したターンのエンドフェイズ時、自分のスピードカウンターは0になる。

Sp セカンド・チャンス
通常魔法

自分のスピードカウンターが2つ以上ある場合に発動することができる。
自分のスピードカウンターを全て取り除き自分のモンスター1体を手札に戻すことで、自分のモンスター1体はこのターン2回攻撃できる。

こんなもんでしょうかね。

遊奈「自分で作っておきながら、これはひどいわね」

デユナメスのノーコスト破壊はけっこう強いと思います。
あとエクシアも切り込み役ができますし、戦闘破壊されても壁が出
てきますしね。

個人的にダブルオーはやればできる子だと思いますが、ほどほどに
ね。

・・・正直、ライザーはどうやって出そう・・・。
困ったな。

遊奈「普通に出せば？」

いや個人的にはちょっと凝りたいし。

遊奈「わがままねー。まあ私もカッコイイ感じで出したいしねー」

gdgdになってきたので、そろそろ終わりますか。

次回『二つ目のオリカ！ エスペリオデッキ』
それではみなさん、次回までごきげんよう。

四話『二つ目のオリカ！ エスペリオデッキ』（前書き）

タイトル通り、今回は二つ目のオリカデッキです。

四話『二つ目のオリカ！ エスベリオデッキ』

セキュリティに追われることになった、ラリーの窃盗から数日が経った。

遊星はシティに行くためにD、ホイールの点検を行っている。

私はといえば、オリカで構成したデッキを見ていた。

デュエル中に、あれ？ どうやるんだっけ？とか考えてたら時間の無駄じゃない？

だからすぐに動けるようにコンボとか覚えておくのよ。

そんなこんなで暇つぶしをしていたら、ブリッツたちが帰ってきた。見るとどこか不満げだ。

なにかあったのかしら？

「ブリッツ、なにかあったの？」

「え？ いや、あったといえばあったが、ないといえばないな」

「煮え切らないわね。はっきり言いなさい！」

「ひつ。いやいやマジでなんもなかったって」

本当かしらね？

そんな風に思っただけと見るけど、目をそらされた。問い詰めようとしたけど、誰かの気配がした。

「よう、ブリッツくん。ここがお前らのアジトか？ いいところに住んでんじゃねえか」

「こんなところ、お前らにゃあ勿体ねえぜ。瓜生の兄貴、この連中をどかして、俺らで住みましょうよ」

「それも悪くないな・・・お。それはD、ホイールか。お前らには無駄なもんだろ？ 代わりに俺がもらってやる」

こいつら・・・人が黙ってたら好き勝手言っ
てぶっ潰そうかしら。

「こ、これは俺達の希望なんだ。お前達になんか、やるかよ!」

「んだと!？」

「ラリー、ここは俺が相手する。お前は下がっているんだ」

「う、うん。分かった」

あ、遊星が怒ってる。

まあ、あんな風に言われたら怒るわよね。

「じゃあ私は見物でも・・・」

「おうおう遊奈ちゃんよお！ 木村様がお前のD、ホイールを貰いに来たぜ！！」

「はあ。ウザイのが来たわ」

今入ってきた奴は木村。

ここ数日前から、私のD、ホイールを奪いに来るやつ。

いつもは例の変態たちが撃退してるんだけど、今日は出かけてるから私が相手しないといけない。

憂鬱だわ。

「どうしたよ、そんなツラしてよ！ とうとう観念したか？」

「そうね。毎日来られてもうるさいし、ここらで決着つけないとね」

「へん、そうこねえとな！ 俺とデュエルして、俺が勝ったらそいつは貰う！ ただし俺が負けたら、一切ここにあ近づかない！」

「それでいいわ」

ほんとに面倒だわ。

ラリーたちが心配そうな顔してるけど、私の実力を忘れたのかしら？

「じゃあ・・・」

「始めようか」

「^{デュエル}決闘！！」

遊奈

LP 4000

手札 5

木村

LP 4000

手札 5

「俺の先攻、ドロー！」

木村

手札 5 ↓ 6

何が来るのかしらね。

「俺は暗黒界の狂王ブロンを攻撃表示で召喚！ ターンエンド！」

木村

手札 6 ↓ 5

暗黒界の狂王ブロン

ATK 1800

あれ、カード伏せないの？

いや簡単に勝たせてくれるならそれでいいけど・・・。

「私のターン、ドロー」

遊奈

手札 6 ↓ 5

ううん、まあまあね。

それほど悪くはないけど、魔法・畏がないわね。
ま、いいかな。

「私はエスペリオ・ネーサを守備表示で召喚。ターンエンド」

遊奈

手札 6 ↓ 5

エスペリオ・ネーサ

DEF 800

身を丸めた小悪魔っぽい女の子が現れた。

うん、可愛い。

けど次のターン、大丈夫かな？

この子はリクルーターだから一応は安心はできるけど・・・。

「俺のターン、ドロー！」

木村

手札 5 ↓ 6

「俺は永続魔法、暗黒界の取引を発動！ お互いにカードを一枚ドローし、その後カードを一枚墓地に送る！」

遊奈 5 ↓ 6 ↓ 5

木村 4 ↓ 5 ↓ 4

まずい。

暗黒界の猛攻が始まる！

「手札から墓地に送られたことにより、暗黒界の武神ゴールドから特殊召喚！」

暗黒界の武神ゴールド

ATK 2300

うわ……。

自分で捨てたのに戻ってくるとか、ひどすぎるわ。
なにあのインチキ効果。

「俺はゴールドでエスペリオ・ネーサに攻撃！」

ゴールドによってネーサが破壊された。

ああ・・・ネーサが半泣きで消えていった。

けど、この子は他のリクルターとは違うのよ！

「ネーサの効果発動！ この子が戦闘破壊された場合、デッキから同名のカードを特殊召喚する！」

エスペリオ・ネーサ

DEF800

他のリクルターと違うところ。

それは表示形式を選ぶこと。

基本、リクルターは攻撃表示か、守備表示で特殊召喚される。けれどこの子はその前提を覆す・・・！

その分、能力値は低いんだけどさ。

「ちっ。攻撃しても無駄か。なら、このままターンエンドだ！」

「私のターン、ドロー！」

遊奈

手札5↓6

この状況をひっくり返せるカード。
お願い・・・来て・・・。

そつと見てみると・・・。

「来た！ 私のフィールドにエスペリオと名のついたモンスターがいることで、エスペリオ・ヤッサを特殊召喚する！」

遊奈

手札6↓5

エスペリオ・ヤッサ

ATK1600

まだ終わりじゃないよ・・・。
あれ、これ前も言っただような。
多分気のせいだね。

「そして私はチューナーモンスター、エスペリオ・フローターを召喚！」

遊奈

手札5↓4

エスペリオ・フローター

ATK0

これでシンクロができるわ。
このデッキのコンセプトはそれなりの継戦能力を持たせつつ、シンクロさせること！
本当なら、遊星みたいにローレベルシンクロが狙えるんだけど、今回は大きいのが出るわよ！

「レベル3のエスペリオ・ネーサとレベル4のエスペリオ・ヤッサに、レベル1のエスペリオ・フローターをチューニング！」

一輪の輪の中に、七つの星が並ぶ。
それを見ながら、シンクロ口上を口にする。

「暗き闇の底の王者が、深淵に引きずり込む。シンクロ召喚。絶望を抱かせる、エスペリオ・ジェノサイドキング！」

エスペリオ・ジェノサイドキング
ATK2900

王様が着るような豪華な服装を纏った銀色の悪魔が、私のフィールドに仁王立ちしている。
やはりソリッドビジョンは最高だ。
これを作ったKCは素晴らしい。

「な！ 攻撃力2900だと!？」

「ジェノサイドキングの効果発動！ このカードがシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地のエスペリオと名のつくモンスターを特殊召喚する！ 私は墓地のエスペリオ・アタッカーを選択する！」

「そんなモンスター、いつの間に!？」

「あんたの暗黒界の取引の効果よ・・・まあ、この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃力・守備力は半減し、効果も無効化されるのだけだね」

エスペリオ・アタッカー

ATK1100

でも、攻撃表示でしたのは攻撃させるためじゃないんだけどね。

「そして魔法カード、ワン・フォー・ワンを発動。手札のモンスターを墓地に送り、デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する」

「まだ出るのか!？」

遊奈

手札4↓2

「私は二体目のエスペリオ・フローターを特殊召喚！」

「またチューナー・・・ということは！」

「ご名答・・・私はレベル5のエスペリオ・アタッカーにレベル1のエスペリオ・フローターをチューニング！」

今度は一輪の輪に対して、五つの星が現れた。
そして再び、シンクロ口上を口にする。

・・・余談だけど、これが一番苦戦した。
なかなかつかいいのが浮かばなかったから。

「暗き闇の底で鍛えられし剣が、今ここに！ シンクロ召喚！ エスペリオ・ウォリアー！」

エスペリオ・ウォリアー

ATK2400

二体目のエスペリオのシンクロモンスター。

現実で言うなら、インフェルニティのデッキコンセプトに似てるかもしれない。

圧倒的な展開力とともにシンクロを連打。

・・・うん、似てるわ。

「馬鹿な・・・二体目のシンクロモンスター・・・！」

「挑む相手を間違えているのよ、あんた」

こっちはチートカード群byミカエルよ？
主人公補正とか、あんなチートがないのに、勝てるわけないじゃない。

「バトル・・・ジェノサイドキングで、ゴールドを攻撃。ジェノサイド・バーン！」

「くう！」

木村

LP4000↓3400

ジェノサイドキングの放った銀色のビーム的なものが、ゴールドを破壊する。

門とかがないとそれなりの打点のモンスターでしかないわ。
バックがないからなおさらね。

「エスペリオ・ウォリアーで、ブロンに攻撃。そしてこの時、エスペリオ・ウォリアーの効果発動！ このカードが攻撃する時、墓地のエスペリオと名のついたモンスターを除外することで、そのモンスターの攻撃力をエスペリオ・ウォリアーに加える！ 私が除外するのは、エスペリオ・アタッカー！」

エスペリオ・ウォリアー

ATK2400↓4600

「なんだ、そのふざけた効果は!?!」

「悪く思わないでね。エスペリオン・スラッシュ!」

「ぬああーーーーー!」

木村

LP 3400 ↓ 600

うう、ぎりぎり残っちゃった。

こっいう時って結構怖いよね。

「カードを一枚伏せて、ターンエンド」

遊奈

手札 2 ↓ 1

「俺のターン、ドロ」

木村

手札 4 ↓ 5

「来た! 俺は暗黒界の取引の効果発動! お互いに手札を一枚捨てて、一枚ドロだ」

遊奈

手札 1 ↓ 0 ↓ 1

木村

手札 5 ↓ 4 ↓ 5

ニヤリと、木村が笑った。あの顔はきつとキーカードを引いたわね。

「墓地に送られた暗黒界の武神ゴルドは特殊召喚できる」

暗黒界の武神ゴルド

ATK 2300

「そして永続魔法、一族の結束を発動！」

木村

手札 5 ↓ 4

暗黒界の武神ゴルド

ATK 2300 ↓ 3100

攻撃力がジェノサイドキングを上回った！？

でも、私の伏せカードは聖なるバリア・ミラーフォース。

これで、あのインチキ野郎もイチコロよ！

「さらに暗黒界の雷を発動！」

あ、やば。

ミラフォが……………。

「手札を一枚墓地に送り、その伏せカードを破壊する！」

木村

手札4 ↓ 2

あー、ミラフォが。

でも一応はまだ対策はあるんだけどさ。

ていうかさっき、取引の効果で引いたんだけども。

「これで締めだ。ライティング・ボルテックスを発動だ！」

木村

手札2 ↓ 0

ぎゃあ！

これはひどいわ。

一発で状況が。

「ゴールドでダイレクトアタックだ！」

「うぐう」

遊奈

LP 4000 ↓ 900

「俺はこれでターンエンドだ。次で勝負が決まるなあ、遊奈ちゃんよ？」

まだ大丈夫。

これ以上出てきたらやばかったけど、これで打ち止めなら勝機は十分以上にあるわ！

「これが私のラストターンね、ドロー！」

遊奈

手札 1 ↓ 2

ふっ、私の勝ちね。

運命は私に味方したわ。

「私はエスペリオ・コスタを召喚。そして、エスペリオ・コスタの効果を発動。墓地のレベル3以下のエスペリオと名のつくモンスター1体を特殊召喚」

遊奈

手札2 ↓ 1

エスペリオ・コスタ

ATK 700

「私は、墓地のエスペリオ・フローターを特殊召喚！」

エスペリオ・フローター

ATK 0

「そして自分フィールドにエスペリオと名のつくモンスターが存在することにより、エスペリオ・ヤッサを特殊召喚！」

遊奈

手札1 ↓ 0

エスペリオ・ヤッサ

ATK 1600

これがこのデュエルでの最後のシンクロ。
呼ぶのはこのデッキでのエースモンスター！

「レベル3のエスペリオ・コスタとレベル4のエスペリオ・ヤッサに、レベル1のエスペリオ・フローターをチューニング！」

一輪の輪の中で、七つの星が一行に並ぶ。

そして私はその光景を見ながらシンクロ口上を口にする。

「暗き闇の底より、大いなる竜が飛び立つ。其は黒き翼なり。シンクロ召喚。飛翔せよ、エスペリオ・フライング・ドラゴン！」

エスペリオ・フライング・ドラゴン
ATK3000

現れたのは黒い竜。

色の深さでいえば、真紅眼の黒竜よりも黒い。

その姿は、どことなく遊星が持っていたスターダスト・ドラゴンと似ている。

つまり、何が言いたいかと言えば、

「ふつくしい……………」

「おお……………！」

こんなところだろう。

対戦相手の木村でさえ感嘆している。

でも見とれてるのを邪魔するみたいで悪いけど、この子の能力は酷

いよ？

「エスペリオ・フライングの効果を発動するわ。一ターンに一度、墓地のエスペリオと名のつくカードを三枚まで除外し、除外した枚数だけフィールド上のカードを持ち主の手札に戻すことができる」

「バウンスだとい？」

「墓地のエスペリオ・フロッターを除外して、あんたのゴールドを手札に戻す」

これで木村のフィールドには暗黒界の取引だけ。
壁もない。

あとは攻撃するだけね。

「ちよつとてこずったわね。エスペリオ・フライング・ドラゴンで、ダイレクトアタック。スカイ・ブラスト！」

木村

LP600↓0

エスペリオ・フライング・ドラゴンの口から放たれた黒い衝撃波が、木村に直撃した。

「……いや比喻よ？」

闇のデュエルじゃないんだからさ。

それにしても、なんか私はこっちよりもGNデッキもといダブルオ

ーデッキの方が使いやすかったわ。
なんでかしら？

私がダブルオー厨だから、ってそんなに厨でもないんだけど。

とりあえず遊星の方は見たらタイミングが良かったのか、ちょうどデュエルは終わっていた。

てかあの台詞ってジャックのじゃない。

あれ、気にいってるのかしら？

そうそう、あのあと木村はもう会わないから写真撮ろうと言ってきたので撮った。いた。

遊星にひつついたらなんか顔が赤かった。

さっきのデュエルでの興奮が収まっていなかったのだろうか？

デュエルって興奮しちゃうよね、特に逆転した時とかさ。

そんなことを考えていたら全員にため息つかれた。
一体なんだって言うのかしらね。

四話『二つ目のオリカ！ エスペリオデッキ』（後書き）

どうでしたでしょうか、今回のオリカは？

個人的にはこっちよりも、ダブルオーデッキの方が好きなんですが。

次回は簡単な設定です。

遊奈はどんな感じの人物なのかっていうのを適当に書きます。

遊奈「ちよつと（怒）」

まあまあいいじゃない、そんなん気にしないだろ？

遊奈「まあそんなんだけども………ねえ？」

しっかり書けと？

ならスリーサイズまで書くけど？

遊奈「……………」

あ、黙った。

じゃ、適当にやってもいいか。

それでは次回『設定1』

皆様、次の機会まで、ごきげんよう！

遊奈「設定1ってタイトルはどうかと思うなー」

設定（前書き）

今回は設定DEATH！

．．．．．ではなく設定です。

設定

瀬川遊奈

年齢：18歳（遊星と同年）

容姿：白髪赤目（アルビノでは無い）の美女

余談ながら作者は白髪キャラが好き

性格：さっぱりして明るい性格。あと鈍感。他人のことには鋭い、でも自分のことには鈍い。つまり鈍感（大事なことなので二回言いました）

身長：167cm

体重：ヒ・ミ・ツ

スリーサイズ：これもヒミツ・・・けどあえて言うならスタイルは良いわ。あと巨乳ね。アキほどじゃないけど。

使用デッキ：代行天使（ただしもう使わない？）・ダブルオーデッキ（GNデッキとも呼ぶ）・エスペリオデッキ（展開次第では無くなる？）

オリカ紹介

既出のダブルオー系オリカについては三話参照を願います

エスペリオ系列

エスペリオ・ネーサ

効果モンスター

レベル3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力1200 / 守備力800

このカードが戦闘で破壊された場合、手札またはデッキから「エスペリオ・ネーサ」1体を特殊召喚する。

エスペリオ・ヤツサ

効果モンスター

レベル4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力1600 / 守備力1000

自分フィールド上に「エスペリオ」と名のついたモンスターが存在する場合、このカードは特殊召喚できる。

エスペリオ・フローター

チューナー（効果モンスター）

レベル1 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力0 / 守備力0

このカードは戦闘では破壊されない。

自分フィールド上に「エスペリオ」と名のついたモンスターが存在し、このカードが特殊召喚に成功した時、自分はデッキからカードを一枚ドローする。

正直この効果は一度も使いませんでした。
要反省ですね。まる。

エスペリオ・ジエノサイドキング

シンクロ・効果モンスター

レベル8 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力2900 / 守備力2000

闇属性チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードのシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在する「エスペリオ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力・守備力は元々の数値の半分になる。

エスペリオ・アタッカー

効果モンスター

レベル5 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻撃力2200 / 守備力1200

このカードのアドバンス召喚に成功した時、このカードの攻撃力はリリースしたモンスターのレベルの合計×200ポイントアップする。

……実用性ないな、このカード。

エスペリオ・ウォリアー

シンクロ・効果モンスター

レベル6 / 闇属性 / 戦士族 / 攻撃力2400 / 守備力1500

チューナー+「エスペリオ」と名のついたモンスター1体以上

このカードが戦闘を行う場合、墓地に存在する「エスペリオ」と名のついたモンスターを除外することで、このカードの攻撃力・守備力はそのモンスターの攻撃力の数値分アップする。

エスペリオ・コスタ

効果モンスター

レベル3 / 闇属性 / 戦士族 / 攻撃力700 / 守備力1600

このカードの召喚に成功した時、墓地に存在するレベル3以下の「エスペリオ」と名のついたモンスター1体を特殊召喚できる。

このカードが破壊される場合、手札のカード一枚を墓地に送ることで破壊を無効に出来る。

エスペリオ・フライング・ドラゴン

シンクロ・効果モンスター

レベル8 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻撃力3000 / 守備力2500
闇属性チューナー＋「エスペリオ」と名のついたモンスター1体以上
ーターンに一度、墓地の闇属性モンスターを三体まで除外すること
で、除外した枚数まで相手フィールド上のカードを手札に戻す。
このカードは魔法・罠カードの効果の対象にならない。

……これはやりすぎかな。

まあ欠点を挙げるなら……蘇生とかが出来ないくらいかな。
バックが豊富なら、ほぼ敵なしでしょう。

続いて、D ホイールの説明……要りますかね？

スカイ・フライヤー

遊奈と愉快的仲間達によって作られたD ホイール。

遊星号と同じくジャンクパーツによって作られている。

メ蟹ツクでお馴染みの遊星も設計・組み立てに参加しているが、諸
事情により遊星号よりもDM仕様になっている。

諸事情には突っ込まない方針で……。

遊星号と同じ赤いボディカラーであり、ハイブリッドタイプでもある。
る。

全体的に遊星号と似ている。

設定（後書き）

どうでしたでしょうか。

なんか書いてて「ぼくのかんがえたさいきょうのかーど」というフリーズがずっと頭の中でぐるぐるしてました。

これが主人公最強モノ、そしてオリ力が絡むということなのか・・・！

恐怖・・・！！ 圧倒的恐怖・・・！！

まああほな事は放っておいて、とりあえず次回予告です。

ジャックが所持するスターダスト・ドラゴンを取り返すために、シテイへと行くことを決意する遊星。

セキュリティへのハッキングを行い、唯一の通過経路を見つける！

しかしそこを通るには五分の猶予しかなく・・・！！

さらに運悪く以前戦った牛尾とセキュリティの一人に見つかり・・・！

デュエルには勝ったものの、遊奈は間に合わず、流れ来る廃棄品に呑み込まれる・・・！！

遊奈は無事に帰ってこれるのか・・・！！

遊星「遊奈・・・生きていてくれ・・・！！」

次回、第五話『遊奈、死す』

デュエル、スタンバイ！

遊奈「じらー――――！！！」

五話『駆け抜ける遊星！想いは共に』（前書き）

今回はシティ突入です。

基本、拙作は遊奈の一人称で進める予定ですが、他の人物の一人称または三人称で進めるのでもいいかなーとも思っています。よって時々、そのようになると思います。

それでは・・・どうぞ。

五話『駆け抜ける遊星！想いは共に』

諸君、あれから数日が経った。
あれからっていつからだ？
そんなもの言える訳ないだろう！

こほん、すまないね。少々取り乱したようだ。
改めて朝の挨拶、即ち『おはよう』を「「おはようございまーす、
姫！」」挨拶はすでに終わっている！！
私語は慎め！

「遊奈、朝飯が出来たようだが・・・」

「え！ 今行く！」

諸君、続きは・・・・・・そうだな、WEBで。

これが瀬川遊奈の一日の、始まり・・・・・・・・・・！

「変なナレーションを流すな！」

「・・・・・・・・・・遊奈？」

「やめて！ そんな可哀相なものを見るような目で見ないで！」

「大丈夫だ、遊奈。たとえ遊奈がどんなことになっても俺は受け止

めてみせる」

その優しさが痛い!?

時間は飛んで夜。

遊星のシティ進入作戦までそろそろね。
命名は私よ。

さてそろそろ廃棄物の流出が止まる頃ね。

え？ 何が始まるのかって？
そりゃあナニに・・・て遊星、そんなに見ないで。
冗談だつてば・・・。

「んんっ。さて遊星、出発よ。準備は？」

「大丈夫だ。遊奈も、本当に良いのか？」

「へーきよ。そっちこそ、間に合わなかったとかいう事にならないようにしなさいよ」

私たちの労力が無駄になるじゃない。

．．．．．そろそろ行かないとね。

「遊星！」

「ああ」

言葉を交し合い、D ホイールを走らせる。

今回の目的は、ただ遊星を無事にシティに到着させること。
ただ、それだけ。

本来なら一人でも大丈夫だと思うけど、念には念を押して私も途中で
まで一緒に行くことになった。

ていうか、私がついていくことにした。

いやなんとなく．．．．．妙な胸騒ぎがしてね。

．．．．．あれ、これフラグ？

変なフラグ立てちゃった？

．．．．．いやいやねー、もしかしたらあるかも。

ないよね？

私たちは今、廃棄物処理施設に来ている。

ここの地下からシティに伸びている廃棄物を流し込むパイプが通っ

ている。

パイプとは言ってもかなりデカイけれど・・・。

・・・？

今、後ろからセキュリティのサイレンが聞こえたような・・・。

「待ちやがれ、屑野郎どもおー！」

本当にフラグだったんだ、あれ。

・・・って今はそんなこと言ってる場合じゃなくて！

「遊星！」

「分かってる。遊奈、ここは任せてもいいか？」

「モチよ。さっさと行きなさい」

遊星はひとつ頷くと、D ホイールを加速させる。
そのまま夜の闇に消えていった。

「待ちやがれ！」

「あんたこそ待ちなさい」

言葉とともにD、ホイールをぶつける。

・・・が巧みに避けられてしまった。

意外と上手い操縦に目を瞠っていると、横合いから衝撃が来た。

「ふん、久しぶりだな。貴様とあの男のお陰で、上からの私と牛尾への信用が薄くなってしまったな。私怨で悪いが、私とデュエルしてもらうぞ」

「あんたはあの時の・・・」

思い出されるのはラリー窃盗事件の時に追いかけてきたセキュリティの男だ。

まさかこれがフラグ・・・!?

あ、もちろん悪い意味のね。

「牛尾！ 先に行け！」

「助かるぜ、竹虎！」

どうやらこのセキュリティの男は竹虎という名らしい。

・・・で、そうじゃない！

あの牛尾という男が加速していく。

私が止めないといけないのに・・・。

「待ちなさい、あんたは私が足止めを・・・」

「いいや、貴様とデュエルするのはこの私だ。フィールド魔法、スピード・ワールド。強制発動！」

『スピード・ワールド、セット・オン。パイロットモード・・・マニュアル』

あ、マニュアルのままだ・・・。
でもさっさと終わらせるためにはこれでいいかな？

「ふん、貴様がマニュアルだろうが、私には関係ない。新たに得た特殊追跡デッキで打ち倒してくれる！」

「特殊、追跡デッキ・・・」

なんか強そう。
けど、私だって負けないってね。

「さっさと決着つけたいから・・・」

「ふん、忙しい奴だ。いいだろう・・・」

「^{デュエル}決闘！！！！」

遊奈

LP 4000

手札 5

竹虎

LP 4000

手札 5

「私が先攻を貰う！ ドロー！」

竹虎

手札 5 ↓ 6

「私はゲート・ブロッカーを守備表示で召喚。カードを一枚伏せ、ターンエンド」

竹虎

手札 6 ↓ 4

ゲート・ブロッカー

DEF 2000

またあいつか。

けど初手で出されたら厄介だし、なかなかのステータスを持つ壁だから、全くおかしくない選択なのよね。

「私のターン、ドロー」

遊奈

手札 5 ↓ 6

S p c 0

竹虎

S p c 0 ↓ 1

やっぱりゲート・ブロッカーの効果は厄介・・・！
・・・けど手が無いわ。
ここは様子見ね。

「私はGN - 明橙の可変機兵ガンダムキュリオスを攻撃表示で召喚」

遊奈

手札 6 ↓ 5

GN - 明橙の可変機兵

A T K 1 5 0 0

「カードを二枚伏せて、ターンエンド」

遊奈

手札5↓3

「ふつ、手段がないか？」

「うつさいわね。次のターンから反撃すんのよ」

「ほう、そのチャンスが来るといいがな？ 私のターン、ドロー」

竹虎

手札4↓5

S p c 1↓2

遊奈

S p c 0

ああは言っただけ、流石にこの状況はまずい・・・。

二枚作れたとは言っただけ、あの子がいないとこのデッキはパワー不足だからなあ・・・。

「私はチューナーモンスター、ジュツテ・ナイトを召喚！」

竹虎

手札5↓4

「チューナー！？ まさか・・・」

「いかにも・・・レベル4のゲート・ブロッカーにレベル2のジュッテ・ナイトをチューニング！ さあ行くぞ、シンクロ召喚！ ゴヨウ・ガーディアン！」

ゴヨウ・ガーディアン

ATK2800

はわわわ・・・当時の環境を荒らしまくった奴来たー！！
そういえば友達がアニメの方でもゴヨウしてたとか言ってたけど、
こういうことなのー！？

「ふ、これが権力の力！ いけ、ゴヨウ・ガーディアン。奴のモンスターに攻撃だ、ゴヨウ・ラリアット！」

「させない、リバーズカード、オープン！ くず鉄のかかし！ 相手モンスター一体の攻撃を無効にする！」

「防いだか・・・だが、そう来なくてはな。こんなに簡単にやられてもらっては困る」

「・・・くず鉄のかかしは効果発動後、墓地には行かずに再びセツトされる」

なんとか凌いだけど、多分長くは続かない。

キュリオスの攻撃力はそれほど高くない。

それなりの打点を持ったモンスターを出されたら・・・持たない。

「私はこのままターンエンド。さあ、どう足掻く？」

「くっ、むかつく奴ね。私にだって、色んな手はあるのよ！ ドロ
ー！」

遊奈

手札3 ↓ 4

S p c 0 ↓ 1

竹虎

S p c 2 ↓ 3

ゲート・ブロッカーがないお陰で、私のスピード・カウンターが増える。

・・・これじゃあ雀の涙くらいにしか意味は無いけど。

「GN - 蒼穹の粒機兵ガンダムエクシアを攻撃表示で召喚」

遊奈

手札4 ↓ 3

GN - 蒼穹の粒機兵

ATK1900

・・・念のためにキュリオスは守備表示にしておこう。

「キュリオスを守備表示にし、ターンエンド」

GN - 明橙の可変機兵

DEF 1200

「ふ、ははははは！ もう終わりが、万策尽きたか！？」

「うるさいわね！ さっさと進めなさいよ、こっちも急いでんのよ！」

「ふん、小うるさい女だ。私のターンだ、ドロー」

遊奈

SpC 1 ↓ 2

竹虎

手札 4 ↓ 5

SpC 3 ↓ 4

「ふ、私はSp・ソニック・バスターを発動！ このカードはスピード・カウンターが四つある時に発動できる！」

竹虎

手札 5 ↓ 4

「やばい！」

「自分のモンスターを1体選択し、そのモンスターの攻撃力の半分の数値のダメージを、相手ライフに与える！ 私はゴヨウ・ガーディアンを選択！ よって、貴様に1400ポイントのダメージ！」

「ぐうう・・・」

遊奈

LP 4000 ↓ 2600

SpC 2 ↓ 1

この程度なら、まだなんとか・・・！

「ふん、これで終わりと思ったか？ 私は、Sp・ダッシュ・ピルファアを発動！」

竹虎

手札 4 ↓ 3

「なっ・・・！」

「スピードカウンターが四つ以上ある時、相手の表側守備表示モンスターのコントロールをエンドフェイズまで得る。私は、その羽根

つきを貰う」

なんでその呼び方を・・・！

・・・でもそれは悪手ね。

「キュリオスの効果発動！ このカードのコントロールが相手に移ったとき、相手に800ポイントのダメージを与える！」

「馬鹿な・・・！」

竹虎

LP4000↓3200

ピンポイントだけど、効果はあるのよね。

ライディングだとそんなに使えないけど、スタンディングだとコントロールを奪う系のカードはそれなりにあるからね。

・・・サポート、ていうか効果を活かすためのカードもあるんだけど。

「猪口才な！ バトルだ、ゴヨウ・ガーディアンで、蒼い貴様に攻撃だ！」

今、思っただけだ。

なんで普通に名前で呼ばないのかしら・・・。

敵役は主人公側の機体は、仇名（でいいのかな？）で呼ぶのが基本

なの？

ていうか主人公側って私は何言ってるんだ？

「リバーズ、オープン。くず鉄のかかし。攻撃を無効にし、再びセツトする」

「そいつを待っていた。私は奪った羽根つきで、蒼い貴様に攻撃だ」

血迷ったのかしら。

攻撃力ならエクシアの方が上。

ここで仕掛けることに、なんの意味が・・・？

「攻撃力ならエクシアの方が上よ！」

「この瞬間、リバーズカード、オープン。特殊迎撃部隊を発動。相手モンスターの攻撃力・守備力をエンドフェイズまで、自分フィールド上のモンスターの数×500ポイントダウンさせる」

「・・・てことは」

「蒼いヤツの攻撃力は1000ポイントダウンだ！」

GN - 蒼穹の粒機兵

ATK 1900 ↓ 900

まずっ、これが狙い・・・！？

「破壊しろ！」

「させない！ 手札のデユナメスの効果発動！ このカードを墓地に送り、戦闘を行うGNモンスターの攻撃力を1700ポイントアップさせる・・・対象はもちろん、エクシア！」

GN - 蒼穹の粒機兵

ATK900 ↓ 2600

「なに！」

竹虎

LP3200 ↓ 2100

spc4 ↓ 3

腰からビームサーベルを引き抜き、切りかかって来たキュリオスを右腕の大剣、GNソードで弾き貫く。

キュリオスはそのまま爆散した。

・・・つかこれって、ソリッドビジョンだよね？
なんか火花散ってるんだけど。

「小癪な奴め。私はこのままターンエンドだ」

小癪と言われても負ける訳にはいかないんだから仕方ないじゃない。
勝って遊星をシティに送らないと……。

『遊奈！』

え？ このタイミングで通信する？

ていうか、向こうはパイプの中……よね？

しかもデュエル中だし……なんでこっちに通信を……？

『遊奈、どうやら今日に限って廃棄物処理施設あっちで不都合があったようだ。お陰で遊奈も来れる。こっちに来てくれないか？』

あー、そういうこと。

今なら間に合うからついてこい、と。

良いかもね。

私もシティには興味あったし……。

一つ頷くと、そこに込めた意味を遊星は感じ取ったのか、遊星も頷き通信を切った。

切れたのを確認しないままスカイ・フライヤーの進行方向を反転させる。

行く先は処理場の中。

「待て、どこに行こうと言うのだ!」

「・・・流入が遅れるんでしょう?　なら私も遊星の後を追っただけよ」

「行かせると思っのか?」

「さつさと終わらせて、押し通るだけよ!　私のターン、ドロー」

遊奈

手札 2 ↓ 3

s p c 2 ↓ 3

竹虎

s p c 3 ↓ 4

くっ、あの子が来ない。

・・・このカードに賭けるしか、ないわ。

「自分のスピードカウンターが2つ以上あることで、私はこのカードを発動することができる・・・s p -エンジェル・バトン!　2枚ドローし、手札から1枚墓地に送る」

遊奈

手札 3 ↓ 2 ↓ 4 ↓ 3

……自然、笑みが浮かぶ。

この子を引くこの瞬間を、待ち望んでいた。

「自分フィールド上にGNモンスターが存在することで、チューナーモンスター、GN - 原初の粒機兵^{オーガンダム}を特殊召喚」

GN - 原初の粒機兵

ATK1000

「なつ、チューナーだと！？ 以前はコンタクト融合にしか使っていないはずだ！」

「別に宣言する必要なんてないじゃない」

「……!!」

馬鹿みたいな顔しちゃって。

別に詐欺とかじゃないんだし、そこまでこつちを睨む必要はないでしょ。

「さあ行くわよ。レベル4のGN - 明橙の可変機兵に、レベル2のGN - 原初の粒機兵をチューニング！」

背中のGNフェザーを展開させながら消えていくオーガンダム。
放出された粒子の残滓が、二輪の輪となる。

その輪の中にキュリオスが入る。

輪の中のキュリオスが消失し、代わりに四つの星が一行となる。

「夕焼けの翼が蒼天を翔る。新たな力を存分に揮^{ふる}え。シンクロ召喚。GN - 明橙^{ガンダムアリオス}の新可変兵！」

GN - 明橙の新可変兵
ATK2600

輪を貫いた閃光の中から、オレンジ色の機兵が現れた。
現れた勢いそのままに一回転し、先端が鋭いシールドをゴヨウ・ガ
ーディアンに突きつける。

「ふ、この場で出すからにはエース級かと思ったが、大した事はなさそうではないか。攻撃力が劣っているのに、何が出来る！」

「攻撃力しか見ていないのなら、あんた負けるわよ」

廃棄物を流し込むパイプのある区画までもう少し。
急がないとね。

とりあえず、さっさとこいつを倒さないとね。

「私はGN - 紫電の重機兵を通常召喚」
ガンダムヴァーチェ

GN - 紫電の重機兵

ATK1800

「そうか、まだ通常召喚が残っていたな・・・しかしそれで、どうするのだろうか?！」

「そう慌てないでよ。このカードが最後の切り札!」

指差すのは、私の場に伏せられた一枚のリバースカード。
これは遊星と一緒にカードを拾っているときに見つけた。
二枚しか見つからなかったため、二人で一枚ずつにしたのはいい思い出だ。

「早速お披露目しましょうか。リバースカード、オープン。エンジェル・リフト」

「・・・まさか?!」

そう、蘇生させるのはもちろん・・・!

「エンジェル・リフトは墓地のレベル2以下のモンスターを特殊召喚する。私は墓地から、GN - 原初の粒機兵を特殊召喚」

「もう一度シンクロか!？」

「そうよ・・・レベル4のGN - 紫電の重機兵にレベル2、GN - 原初の粒機兵をチューニング」

再びGNフェザーを散らしながら消えるオーガンダム。
残った二つの輪に、勢い良く突っ込むヴァーチェ。

「紫電の稲妻が漆黒を裂く。新たな力を存分に揮え。シンクロ召喚。GN - 紫電の重砲機兵!」
ガンダムセラヴィー

GN - 紫電の重砲機兵
ATK 2600

緑色の閃光から現れたのは、巨砲を携えた紫の機兵。
双肩にも大砲が在る。
ツインアイに光が走る。

「何度言わせる! そんなものでは私のゴヨウ・ガーディアンには・・・」

「そつちこそ、何回言わせるの? この子達の真骨頂は、その効果にこそあるのよ!」

百聞は一見に如かずと言うし、見せてやろうじゃない。

ソレスタルビーイングの真の力・・・！

ごめん、私ただの一般人だったわ。

「GN - 明橙の新可変兵の効果を発動。自分フィールド上にGNモンスターが2体以上存在すれば、この子の元々の攻撃力は2900になる！」

「馬鹿な、ゴヨウ・ガーディアンは攻撃力を超えてきたと・・・！？」

廃棄物を流すパイプの中に突入した。
本格的に急ぐ必要はないけれど、さっさと決めるにこした事はないわ。

「アリオスでゴヨウ・ガーディアンに攻撃！ スピア・シールド！」

竹虎

LP 2100 ↓ 2000

アリオスの鋭いシールドが、ゴヨウ・ガーディアンの胸を貫いた。
その際の微かな衝撃で、竹虎の白バイ型のD・ホイールが揺れる。

「これでとどめっ！ セラヴィーでダイレクトアタック！ GNバ

ズーカ・ハイパーバースト！」

「ぐ、ぐおおおおおー！」

竹虎

LP2000↓0

セラヴィーから放たれた高濃度圧縮粒子を使用した砲撃が、竹虎を呑み込む。

攻撃の余波なのか、思い切り転倒した。

ぶっちゃけ、さっきのは・・・まあ、某魔法少女の。ターライト・ブレイカーに見えなくも無い。

というか、彼からしたらトラウマ級の攻撃だろう。自分でやっているってなんだが、彼には一応謝っておこう・・・心の中で。

『遊奈！』

「！びつくりした・・・どうしたの、遊星？」

『今すぐ引き返すんだ！』

どーゆーこと？

別になんともないんだけど・・・。

『俺はなんとかシティには入ることに成功した……だが、今になって廃棄物の流入が始まった。早く引き返すんだ!』

「……………」

『どうしたんだ?』

あー、あれか。

目の前には、さっきまではなんか気づかなかったけど、物凄い量の廃棄物が流れてきた。

今、私は、自分の死に場所を知った。

ていうか、マジでこれ、私死ぬんじゃない?

正直、こんなに呑み込まれて生きていられる訳ないじゃん。

牛尾さんは普通に生きてました。

なんか、今電波的なものを受信したわ。

それはさておいて、とりあえず言っところかしら。

「……遊星」

『なんだ?』

「ジャックの目を覚ましてあげなさい。あんたなら……それが出来るわ」

『遊奈? 何故、そんな言い方なんだ?』

遊星の声が震えている。遊星の顔が、どことなく悲痛に歪んでいる。
・・・いや、私の気のせいね。
だけど私は気に留めない。
覚悟が・・・揺らぐから・・・。

「そんな言い方って？」

『何故、そんな自分で見ようとしなにかのような言い方なんだ？』

「決まってるじゃない。あんななら、きつと出来るからよ」

きつぱりと、これ以上ないってくらい信用と信頼を乗せた言葉。
あと、その他諸々も乗っている気がするけど・・・一番込めたのは
今の二つ。

廃棄物が迫ってきている。
最期に言えるのは、たった一言。

「どこでもあんたの傍に居てあげる・・・遊星」

『ゆ、遊奈ーーーーー!!』

遊星の叫びを聞きながら、私は廃棄物に吞まれた。

・
・
・
遊星
・
・
・
。

五話『駆け抜ける遊星！想いは共に』（後書き）

遊奈「・・・・・・・・」

おや、どうしたのかね？

遊奈「いや、これ私おもしろく死んでない？」

さあー、どうでしょうねー？

遊奈「怪しい。めっちゃ怪しい」

H A H A H A、なんのことやら。

あなたには次回に満足さんの憂鬱を晴らしてもらいますよ。

遊奈「はあ？ どういう意味よ？」

そういえば原作知識ないって設定でしたね。
どうでもいいですけど。

まあ次回のヒントというなら、ダークです。

遊奈「ヒントがダーク？ そして京介の憂鬱？ どういうことだ、クアンタ。まるで意味が分からんぞ！」

ネタに走りましたね。

そろそろ次回予告、行きましようか。

遊奈「あ、今日は優しい・・・・んっ、えー、廃棄物に吞まれてしまった私。目を覚ましてみれば、そこは見覚えの無い場所で。いき

なり声をかけられ振り向けば、そこに居たのは・・・！」

次回、遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう。

第六話『怒れる鬼柳 救いだせ、ダブルオー！』

それではみなさま。

遊奈「次回まで、ごきげんよう！」

遊奈「なんで今回は優しかったの？」

死んでるから。

遊奈「……………え？」

六話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介』〈前編〉（前書き）

えー、一言。

予告詐欺、第一弾っ・・・！

といってもタイトルだけ詐欺なんです。

それと本編中の鬼柳さんですが、使用するカードがアニメ版と比べてけっこう違っています。一応、インフェルニティもあるよ・・・

（汗）

その理由については、まあ遊奈が本編中で言ってくれています。

とりあえず後は一言だけ。
ゆっくりして言ってね！

六話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 へ前編』

一人の青年が佇んでいる。

その姿に覇気はない。

どこか虚ろな目をしている。

その少年を、遊奈は知っている。

今はセキュリティによって収容所にいると聞いていたのだが、これはどうということなのかと、遊奈は首を傾げた。

遊奈は、彼に手を伸ばそうとするが、見えない壁によって動きが取れなくなった。

何事かと周りを見るが、一切の邪魔などない。

しかし事実として、彼女は身動き一つ、満足に出来ない。

眼前で彼女の知己である青年――鬼柳京介は、何事か呟いている。遊奈はそれを聞き逃すまいと、耳を傾けた。

「復……した……。そして……。った、チー……。のラスト……ルを」

聞き取れたのは、これくらいだった。

如何せん、距離があつた。

だがこれほど聞けたなら、ある程度予想できる。

なのに、予想は、所詮は予想でしかない。

彼女は……。何も出来ない。

彼に歩み寄ることすらできないのだから。

悔しくて、ただ彼に近づく・・・そんな些細なことすら出来ない自分に腹が立って、下唇を噛み締める。

唐突に・・・頭上から光が降ってきた。

遊奈を迎えるかのように燦々と輝くそれは・・・まるで地獄の底で途方に暮れていたカンダタのもとに垂れてきた蜘蛛の糸のようである。

だから遊奈が、それに向かって手を伸ばしたのは・・・必然だったのだろうか。

一瞬の眩しさの後、浮遊感が遊奈の体を包み、意識が再び落ちた。意識が無くなる直前、遊奈は鬼柳と目が合ったような気がしたが・・・彼女はそれをはっきりと理解しないまま、目を閉じた。

目を覚ますと、そこは薄暗い部屋だった。

中世の貴族・・・と言わずとも、金持ちの屋敷の食堂のような部屋だ。

遊奈は、どうやら部屋に持ち込まれたのだろう長椅子の上で目を覚ました。

上体を起こすと、奥の方にこちらに背を向けている男たちの姿が見えた。

遊奈が起きたのを感じたのか、奥の方でたむろしていた三人が、遊奈へと振り返った。

「目覚めたか、四人目のダークシグナーよ」

初めに口を開いたのは、真ん中の長身で、色素が抜け落ちたような白髪の男だった。

他の二人はフードを深く被っているため、顔が見えない。

「……ダークシグナーってなに？」

今まで聞いたこともない呼ばれ方に頭に？マークを浮かべて問う遊奈。

「……とはいえ前世では、その呼び方をされる人物がどういった存在なのか、彼女は知っているのだが。」

「そうだな、説明をしようか。まずダークシグナーというのは5000年周期で、憎き赤き竜の手先であるシグナーと戦う存在のことだ。そして我らは死の神によって、邪神の代わりに戦うことで仮初めの命を得ている。ここまでは理解したな？」

状況をあまり理解していない遊奈に対して、長身の男――ルドガーは分かりやすく説明をした。

遊奈はルドガーは、見た目そのままの人物ではないと判断した。

だが、遊奈は、彼のことはまだ知らない。

どうやら言動や感じる風格を鑑みるに、おそらく彼がダークシグナ

ーのリーダー格なのだろうと当たりをつけた。
そしてそれは外れてはいない。

「とりあえずは、まあ理解したわ。けど今私たちがダークシグナーとして存在するということは、つまりはその5000年周期の戦いが、もう始まると言うのかしら？」

「ふむ、なかなかに聡明だな。鬼柳が味方にいて役に立つと言うのも、頷けるというものだ」

「えっ！ 京介もダークシグナーなの！？」

ルドガーの言葉に、驚愕を禁じ得ないといった様子で瞠目する遊奈。ルドガーの横に立つ男が、愉快そうに肩を震わせながらフードをはずす。

その顔は紛れもなく、かつての友であり。
だが今は、かつて見たことがない、怒りに顔が歪んでいた。

「くくっ、そうだ遊奈。お前たちの保身のためにセキュリティに売られた、哀れな男がダークシグナーとなって蘇ったのさ！」

「ま、待つて京介！ あれは誤解なの！」

「はっ、誤解ねえ。それも俺を売るために学んだ言葉の選び方か？
だが、もうそんなもんで騙される俺じゃねえぞ」

「だから誤解なんだって！ 私の話を聞いてよ、京介！」

自分をセキユリティに売った（と鬼柳は思い込んでいる）あの時のメンバーの一人である遊奈を前にして、激情を抑えきれずにいる鬼柳。

そしてその鬼柳の誤解を解こうと、悲痛とさえ言える声色で必死に説得しようとする遊奈。

互いに視線は交差しているが、その想いはまるで正反対なものだった。

「・・・ルドガー。こいつに先輩として、ダークシグナー流の戦い方を教えるが・・・構わないよな？」

「・・・好きにするがいい」

「！」

鬼柳の問いをあつさりと承諾するルドガー。

おそらくはここで、真に使えるか否かを見極めるのだろう。

やってやろうではないかと遊奈は腹をくくる。

自分は不本意ながらサテライトの姫などと呼ばれていた。

ならば、サテライトの出身者に勝てない道理などないだろう。なぜなら彼女は、その称号に足る実力を持っているのだから。

「なら、始めようか、遊奈あ！ 闇のデュエルをなあ！」

宣言とともに遊奈と鬼柳を中心に、円状に紫色の炎が広がる。
まるで牢獄のように、二人を閉じ込める檻のように、こつこつと燃え立つ。

「・・・京介、あんたに勝てばいいのね？」

「勝てるもんならな、裏切り者お！」

「「・・・決闘！」」
デュエル

遊奈

LP 4000

手札 5

鬼柳

LP 4000

手札 5

このデュエルで、まずは京介の目を覚まさせるしかないわ。
手っ取り早く話を聞かせるには、このデュエルに勝つしかない！

「私の先攻、ドロー！」

遊奈

手札 5 ↓ 6

この子たちじゃ、あの京介には届かない。
一気にいけないのは、齒がゆいな。

「GNⅠ紫電の重機兵を攻撃表示で召喚」

遊奈

手札6↓5

GNⅠ紫電の重機兵

ATK1800

この子なら、ある程度は保つわ。

・・・本当はエクシアがいいんだけども。

「カードを三枚伏せて、ターンエンド」

遊奈

手札5↓2

「はっ、自分を守る準備だけはいいいんだな、遊奈よお！」

「そんなことはっ」

「俺のターン、ドロー」

鬼柳

手札 6 ↓ 5

話、聞いてよ……。

どうして……そんな冷たい目なの。

「インフェルニティ・ビーストを攻撃表示で召喚し、カードを二枚伏せてターンエンド」

鬼柳

手札 6 ↓ 3

インフェルニティ・ビースト

ATK 1600

インフェルニティ……それが京介の新たな力。

効果は、それほど覚えてはいない。

そして、込められた思いも分からない。

ただひとつ分かるのは、このデュエル……負けられない！

「私のターン……ドロー！」

遊奈

手札 2 ↓ 3

……来ない。

いや、いつまでもあの子に頼ってちゃダメよね。

ここは私のプレイングで、上手く動かさないと。

「私はG N I 明橙の可変機兵を守備表示で召喚」

遊奈

手札3 ↓ 2

G N I 明橙の可変機兵

DEF 1200

守りはこれくらいかな。

あとはリバースカードをどのタイミングで、どう使うか。

少しでもミスしたら、痛いしっぺ返しを食らう。

京介は、それほどの強敵だから・・・。

「ヴァーチエで、インフェルニティ・ビーストに攻撃！」

「リバースオープン！ 永続罠、デプス・アミュレットオ！」

「カウンター罠、発動！ 戦術予報士の読み！」

確かあの罠は手札を一枚捨てて攻撃を無効にする罠だったはず。

あれはここで倒しておかないと・・・私の勘が、警告してきている。

「このカードは自分フィールド上にG N モンスターが居るときに発動できる。相手の魔法・罠の発動を無効にして破壊する！ さあ、

コストとして手札一枚を捨てなさい」

「ちっ」

鬼柳

LP 4000 ↓ 3800

手札 3 ↓ 2

「くくっ、今使つてよかったのかよ？」

「・・・その子は倒しておいた方が、いいと判断したからね」

「ふん、そうかよ俺のターンだ、ドロー」

鬼柳

手札 2 ↓ 3

「インフェルニティ・リローダーを攻撃表示で召喚。さらに魔法力
ード、強制転移を発動」

鬼柳

手札 3 ↓ 1

インフェルニティ・リローダー

ATK 900

あつるえー？

なんでこんなガチカードを京介が・・・。

って最初に会った時に渡してたような。

ということは、今もまだ私との絆は・・・残っているの？

「私はキュリオスを選択するわ」

「どうだ遊奈。仲間を、むざむざと敵に引き渡す気分はよ！」

「・・・生憎と、私は敵に渡したなんて思っていないし、むしろそれは悪手よ、京介」

そう、キュリオスは敵陣についてこそ痛みがあるカード。
それを教えてあげる。

あの、分らず屋の頭デツカチに。

「そしてキュリオスのモンスター効果発動！ このカードのコントロールが相手に渡った時、相手ライフに800ポイントのダメージを与える」

「ぐおお・・・！」

鬼柳

LP3800↓3000

このデュエル・・・もしかしたら、ダメージが現実になっているの！？

「京介！」

「来るんじゃないよ、裏切り者が・・・コントロールが変わった時に発動する効果か。まさしく仲間を売る貴様らに相応しいカードだな！」

・・・ら？

もしかして京介は、私だけでなく遊星たちにも、その憎しみを向けているの？

・・・なら、やっぱりここで止めないと。

京介と遊星たちが、こんなことをするのは見逃せない・・・自分勝手と言われようと、これは譲れない！

「京介・・・もう、言葉で分かつてとは言わない。ここまで来たら、デュエルで話を聞かせる！」

「強行手段かよ。だが、それが一番分かりやすいよなあ！」

京介は、さっきのダメージをもとめせずに、立っている。
・・・どこかそれが、意地を張っているように見えたのは、きっと気のせいなのだろう。

「魔法カード、早すぎた埋葬を発動。ライフを800払い、墓地のインフェルニティ・デーモンを特殊召喚する」

鬼柳

手札 1 ↓ 0

LP 3000 ↓ 2200

インフェルニティ・デーモン

ATK 1800

また・・・！

あれらのカードを持つてゐるってことは、まだ希望はあるわ。
強制転移も、早すぎた埋葬も、私が交換したカード・・・！

だけど・・・違和感がある・・・。

本来なら、入れるはずの無いカード。

なのに、無理やり入れたみたいな感じ。

「インフェルニティ・デーモンの効果発動。手札が0の時にこいつが特殊召喚された時、デッキからインフェルニティと名のつくカードを手札に加える・・・俺は、インフェルニティ・ドワーフを手札に加えるぜ」

鬼柳

手札 0 ↓ 1

・・・ガンじゃなくて、ドワーフ？

まだ持っていないか、それともまた別の思惑があつて・・・？

「てめえのモンスターで、インフェルニティ・リローダーに攻撃」

GN - 明橙の可変機兵

ATK 1500

「あああつ！」

遊奈

LP 4000 ↓ 3400

痛う・・・これが、闇のデュエル。

半端じゃなく痛い・・・！

「ターンエンドだ」

「う・・・私のターン・・・ドロー」

遊奈

手札 2 ↓ 3

まだ600しかライフは減っていないのに、これほどの衝撃。
危険だわ・・・お互いにとっても・・・。

「私はヴァーチェで、キュリオスに攻撃」

「ぐおおお・・・」

鬼柳

LP2200↓1900

よし、僅かにだけドライブを削れている・・・！
このまま地道に押していけば、勝てる。

「私はこのままターンを終了するわ」

「俺のターン、ドロー」

鬼柳

手札1↓2

「・・・くくくく、ひゃーはっはっはっはあ！！」

「・・・何を笑っているの？」

「いやあ、ここでこいつを引くとは思ってもいなくてよお。覚悟しろよ、遊奈？」

直感で理解した。
まずい、と。

何かを出す気だが、確実に京介はこの状況を打開するためのキーカードを出すつもりだ。

インフェルニティを使うに当たってはシンクロが基本だ。なのにチューナーなどいない。

つまり・・・切り札は上級モンスター？

「リバースカード、オープン！ リビングデッドの呼び声！ 墓地のモンスターを特殊召喚する！」

また私が渡したカード・・・！
なぜ京介はこうも私と繋がりがあるカードを使うの？
憎んでいるはずなのに・・・。

「俺はインフェルニティ・ネクロマンサーを特殊召喚。そしてインフェルニティ・デーモンと、インフェルニティ・ネクロマンサーをリリースし、DT ナイトメア・ハンドを召喚！」

鬼柳

手札2↓1

DT ナイトメア・ハンド

ATK 0

ダーク・・・チューナー・・・？

なにそれ、聞いたこと無いわ。

しかも、攻撃力が0でどうするの？

「DT ナイトメア・ハンドが召喚された時、手札からレベル2以下のモンスターを特殊召喚できる。来い、インフェルニティ・ドワーフ！」

鬼柳

手札1↓0

インフェルニティ・ドワーフ

ATK800

「レベル2のインフェルニティ・ドワーフに、レベル10のDT ナイトメア・ハンドをダークチューニング！」

「ダークチューニング!?」

なにそれ、今まで聞いたことも無いわ。
しかも・・・ドワーフの中に星が埋まった・・・。

「漆黒の帳下りし時、冥府の瞳は開かれる。舞い降りる闇よ！
ダークシンクロ！ いでよ、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン！」

ワンハンドレッド・アイ・ドラゴン

ATK3000

「・・・でかい」

闇を思わせる漆黒の楕円から現れたのは、ドラゴンというよりは悪魔と形容した方がむしろ相応しいと言えるほどに、禍々しい存在だった。

その威圧感は、まさしくこの巨体から発せられるほどに圧倒的だった。

「ひやはははあ！　これでめえの命も風前の灯ってやつだなあ！」

「待て鬼柳、そいつは殺すな。我らの同胞なのだぞ」

「消えちまいな、遊奈。ワンハドレッド・アイ・ドラゴンで、そのデカブツに攻撃だ。インフィニティ・サイト・ストリーム！」

「鬼柳・・・！　・・・聞こえていないのか？」

攻撃表示にしているヴァーチェではなく、リローダーに？
・・・けど、京介が無駄なことをするわけがない・・・！
きつと、なにかある。

あと、ルドガーがなにか言ってるけど・・・なにかしら？

「やらせない！　速攻魔法発動、月の書！」

「この瞬間、ワンハドレッド・アイ・ドラゴンの効果発動。墓地の

闇属性モンスターの効果を得る。俺が選択するのはインフェルニティ・ビースト！」

確か、ビーストの効果は手札が0の時、このカードが攻撃をする時に相手は魔法・罠を発動出来なくなる効果。つまり……。

「月の書は、発動できない……！」

「吹き飛ばし！」

「きゃあああああ……！」

遊奈

LP 3400 ↓ 2200

くう……。

痛あ……立とうとしても、立てない。

全身には鈍痛が走って、視界がぼやける。

背中の方では、紫の炎が燃え続けている。

「どうした。立てよ。立って、無様なダンスでも踊り続けろよ、遊奈」

「ダンスは、好きだけど……無様なダンスは……嫌いだよ」

ゆっくり立ち上がる。

痛い、けどのんびり座ってもいられない。

だってこの頭デッカチに、本当の事を教えてあげないといけないから。

「・・・ふん、ターンエンド」

京介が鼻で笑ってるけど、どこか無理してるように見えるのは、気のせいかな。

・・・それにこんな京介は見たくない。

だから私は・・・勝ってみせる。

「私のターン、ドロ―!」

引いたカードを横目で見ながら、私は不敵に笑った。

六話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 へ前編』 (後書き)

妙なところで切りましたが、他に切りようが無かったので勘弁してくださいね。

次回についてですが、遊奈の新たな切り札で決着をつけます。
楽しみにしてください。

次回、七話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 へ後編』
デュエル、スタンバイ！

正直ここから勝てる気がしないのは・・・私だけでしょうか？

七話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 へ後編』 (前書き)

予告どおり、今回は遊奈の新たなエースが登場です。

……ライザーじゃないよ？

それと今回をもって（今更）、原作が崩壊しそうです。

個人的には今回みたいな展開は悪くないと思います。

……個人的には。

あとダークシンクロモンスターどうしょ。

金色便器でいいかな……。

七話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 へ後編』

「京介・・・私のエースを見せてあげる」

遊奈

LP2200

手札4

「おもしれえ。見せてみるよ」

鬼柳

LP1900

手札0

そんなに見たいなら見せてあげる。
私のエースを！

「まずはGN - 蒼穹の粒機兵を召喚。そして私のフィールド上にGNモンスターがいることで、GN - 原初の粒機兵を特殊召喚！」

遊奈

手札4 ↓ 2

GN - 蒼穹の粒機兵

ATK1900

GN - 原初の粒機兵

ATK1000

「その2体で、どうやってワンハンドレッド・アイ・ドラゴンに勝つ気だ？」

「そう急かさないで・・・私はこの2体をデッキに戻す！」

「デッキに？ コンタクト融合か?!」

「そうよ・・・二つの想いが束ねられた時、新たな剣が舞い降りる。コンタクト融合！ 来て、GN - 蒼穹の双粒機兵！」

GN - 蒼穹の双粒機兵

ATK2400

・・・でもこの子だけじゃあ勝てない。
効果で破壊すれば、そのまま勝てる。
けど・・・それじゃあ駄目。

闇のデュエルは・・・確か、敗者に死を齎^{もたら}したはず。
つまりこの状態から勝ったら、京介は・・・。

「どうした、それで終わりか？・・・それともこのデュエルで、俺が負けた時のことでも考えてんのか？」

「！」

「なに驚いてんだ？ 貴様らのように甘い人間の考えていることなど、お見通しなんだよ！」

ここから、どうすれば……。

……今は、この伏せカードに賭けるしかない！

「リバーiscard、オープン！ イオリアの望み！」

「あぁん？」

「このカードは自分フィールド上の、GNモンスター1体につき、私はデッキから1枚ドローできる。その後、私はドローした枚数×300ポイントのダメージを受ける」

「おいおい、どんなマゾカードだあ？ そこまでしねえと駄目なくらい、詰まってるのかよ？」

「私のフィールドには、ダブルオー1体。よって1枚ドローするわ」

遊奈

手札2↓3

……！

このカード。期待通り……！

「ドローした方がいいが、300ポイントのダメージを受けてもらわず」

「うぐうう・・・」

遊奈

LP2200↓1900

京介と、ライフが並んだ。

・・・ここで決めたい・・・決められる。
けれど・・・このままじゃあ・・・。

京介の気持ちは分からなくも無い。

けど・・・誤解ということを教えたい。

私には、ミカエルから貰った力があるのに、どうしようも出来ない・・・。

ていうか、それ不良品とかじゃないわよね？
こんな時に発揮しなくて、どうすんのよ。

こんな時くらい、力を貸しなさいよ・・・！

「・・・ああ？　なんだその腕の光？」

「え？　・・・なにこれ？」

見れば緑色に光る輪つか？が右腕に在った。
なにこれ？

もしかして、これがミカエルの言っていた主人公たちに劣らないほどの力？

でも・・・。

「光ってるだけじゃない・・・」

「くくく、面白えもんを見せてくれるじゃねえか。それで・・・終わるかよ？」

「まだよ！ 何回言っても聞かないあんたに・・・誤解だつて聞かせるまでは、終わりじゃないわよ！」

そう啖呵を切った瞬間、デッキ・・・ていうかデュエルディスクが緑色の輝いた。

私は、何事ー！？と騒いでいるのだが、炎の檻の向こうー外の方で、ルドガーが眉を^{ひそ}顰めていた。

その視線を気にしながらも、不思議と私は落ち着いてきた。

脳裏にカードが浮かび上がってきた。

それも複数。

浮かび上がるのは、ダブルオーと、再び手札に舞い込んだオーガンダム。

そして、もう一枚のカード。その裏側。
それを辿るように、電流が迸る。

それは勝利の方程式だと感じた。

「私のフィールドにGNモンスターがいることで、チューナーモンスター、GN - 原初の粒機兵を特殊召喚！」

遊奈

手札3 ↓ 2

「馬鹿な！ また引いたってのか！？ しかもあえてチューナーと宣言するだ！」

「いくよ・・・レベル6のGN - 蒼穹の双粒機兵に、レベル2のGN - 原初の粒機兵をチューニング！」

オーガンダムがGNフェザーを展開しながら消えていく。
残った二輪の輪にダブルオーが入っていく。
自分上から降ってくるGN粒子を、見るともなく見ながら、シンク口口上を口にする。

「束ねられし想いが、今ここに集う。七天の剣よ、舞え！ シンク口召喚！ GN - 七剣の双粒機兵！」
ダブルオー・セランソード

GN - 七剣の双粒機兵

ATK2800

私の目の前に・・・七つの剣を携えた機兵が舞い降りた。

両手の剣はそれぞれ長い剣、短い剣と分かれた。

後ろ腰には変わらずビームサーベルが二本。

両側のふくらはぎに増設されたハードポイントに一本ずつ短い刀剣が懸架されている。

そして一番に目を引くのは、左肩のコーンスラスターにマウントされた巨大な剣だ。

「シンクロ・・・だと・・・？」

「ダークシグナーになったからって、シンクロしてはいけないのかしら？　そしてセブンスードの効果で、このカードの攻撃力は墓地のGNモンスター1体につき100ポイントアップする！」

GN - 七剣の双粒機兵

ATK 2800 ↓ 3200

「なに！？　ワンハンドレッド・アイを、超えてきた！？」

「さらにここで、セブンスードの効果を発動！　1ターンに1度、手札のモンスターを墓地に送り、1枚ドローする」

けっこう良い効果だけど・・・その分の対価も、ある。

「私はGN - 赤八口を墓地に送り、ドローするわ・・・そして私はこの効果を発動した次のターンのドローフェイズをスキップしなければならぬ」

遊奈

手札2 ↓ 1 ↓ 2

「ふん、だがこれじゃあまだ俺のライフを削りきれねえぜ」

「さつき墓地に送ったのはGNモンスター・・・だからまだ攻撃力は上がるわ」

GN - 七剣の双粒機兵

ATK 3200 ↓ 3300

・・・でも、ここまで来ると、もはや憑いてるレベルだね。
この子が来てくれたお陰で私は勝つ。
・・・やっぱり、勝つしかないわ。

「バトル！ セブンスードで、ワンハンドレッド・アイ・ドラゴンに攻撃！」

「たかが300！ 次があるぜ！？」

「・・・うつん、ここで終わり。手札のデユナメスの効果を発動。
GNモンスターが戦闘を行う場合、このカードを墓地に送ることで、

戦闘を行うモンスターの攻撃力は・・・1600ポイントアップする」

GN・七剣の双粒機兵

ATK 3300 ↓ 4900

「超えているのは300・・・そこに1600が来るって事は・・・！」

「そう・・・0、よ・・・」

セブンスードが、左肩にマウントしたGNバスターソード？を両手で構える。

ツインアイは、揺らぐことなく京介を見据えている。

私の視界にいてる京介は、なぜか揺らいでいる。

・・・いったい何時の間に、そんな技を覚えたのだろう。

「行って、セブンスード！ バスタアア・ブレイドオオ！！」

「がああああああああ！！」

鬼柳

LP 1900 ↓ 0

勝利した。

あの京介との、本気のデュエルで・・・。
しかし・・・勝利の余韻に浸らせてくれないのか・・・。
ふと京介の方を向いた瞬間、視界が緑色に塗りつぶされた・・・。

ここは、どこだろう・・・。
辺り一面が光り輝いている。

けれど・・・眩しくない・・・。
むしろ温かくて、心が温もるようで・・・。
今なら誰とでも、分・か・り・合・え・そ・う・だ。

ふと、気づいた。
なぜか、今の私は裸だ。
どうということだろうか？

「・・・遊奈」

「京介・・・その目・・・」

ふと気づくと、近くに京介がいた。
もちろん、京介も裸だ。
けれど、さっきとは違うのはそれだけじゃない・・・。
彼が纏う雰囲気そのものが・・・さっきとはまるで違う。

それを如実に示すのが、優しい目だ。
さっきの怒りと憎悪に満ち満ちた黒い眼ではなく、昔の仲間こそが
第一だと言っていた澄んだ眼だ。

「遊奈・・・今まで悪かったな。あと、誤解していた・・・」

「え？　ていうか、どうして納得したの？」

自分で完結してくれるなら、それにこしたことはないのだが、どう
もあっさり過ぎて逆に落ち着かない。
一体・・・どうして・・・？

「ここに来たとき、お前の記憶が俺の中に、流れ込んできた。その
中に、あのセキュリティの奴もいた」

あの、というと遊星が名乗り出た時に居てた偉そうなセキュリティ
のことかしら？

「ああ、あの時のことは俺から見ても、遊星はあいつを睨んでいた。
なのに俺はあいつを、あいつらを信用していなかったんだ・・・散
々仲間だと言ってたのに、情けねえ。こんなじゃあ、あいつら
に会っても、きっと満足できねえぜ・・・」

「大丈夫だよ、京介。きっと大丈夫。遊星は・・・遊星だけじゃな
い、きつとみんな、京介のこと分かってくれるよ」

「そうか？　．．．いや俺が信じねえと、誰も信じてくれねえか．．．
．．．ありがとうな、遊奈」

うんうん、京介に笑顔が戻ってくれて嬉しいわ。
これでも十年の付き合いのある仲間だしね！

「遊奈・・・お前はダークシグナーとして以外にも、力があるみてえだ。そのお陰で闇の力に飲まれないで済んでいるのかもしれない。けど、気をつけろよ。何時何があるか分からないんだからよ」

「うん！」

・ ・ ・ あ、光が消えていく。

この不思議空間が、消えていくんだ。

……今気づいたけど、こっつてダブルオーの裸空間じゃない！？

・
・
・
・
・
・
なんでさ。

気がつくとは私は突っ立っていた。

目の前には倒れている京介……って！

「京介！ 大丈夫！？」

「ああ・・・俺はここで終わりだが、最期に会えたのがかつての仲間のお前で良かったぜ」

「ど、どういうこと・・・？」

「闇のデュエルに敗北したものは、消え去るのが定めなのだ」

「ルドガー・・・！」

振り返れば、相変わらずに威風堂々とした出で立ちのルドガー。

発言からして、大物って感じだけど・・・きつと何か知ってるわね・・・！？

「ルドガー、京介を助けられないの？ 今にも・・・消えそうかどうかすばいいの・・・！？」

「ふむ・・・ならばお前の命を差し出すといい」

・・・は？

命を、差し出せ・・・？

なにそのいかにも悪役って感じの台詞。

・・・いいじゃないの。

乗ってやるんじゃないの。

「いいわ、私の命で京介が救われるなら……。それでどうするのよ……！」

「そう慌てるな。まず始めにお前は死んでいると言ったが、正確にはお前はまだ死んでいない。おそらくはその緑色の痣が、なにかしているのだろう……。今のお前は仮死状態であるというのが、正しいな」

仮死状態……。けど、なら私はどうして動いているのかしらね。ますます謎が増したわ。

「そこで、だ……。お前は本当の死を受け入れ、完全なるダークシグナーとなることで、鬼柳に命を与えるのだ……。私は、これについてなんら嘘はついていないぞ？」

「……。いいわ、完全にダークシグナーとなることを、受け入れるわ」

「ほう、度胸のある奴だ……。ならば覚悟しろ、瀬川遊奈よ」

ルドガーが懷から、銃を取り出す。

なんでそんな物騒なもんを持つてる、とかいう突っ込みはなしにしておこう。

今は、京介さえ助かれれば、それでいい。

「遊奈・・・やめろ。そんなことされて、俺が、満足できると思っ
てんのか！」

「あんたの満足なんて、私は知らないわ！　ありがたく私の命を受
け取れ！」

「さらばだ、瀬川遊奈よ」

轟音とともに私の額を、銃弾が貫いていく。
即死のはずなのに、ゆらりゆらりと視界が後ろに流れていくのが解
る。

視界の端で、黒く染まり消えていく途中だった京介の体が、緑色の
粒子に包まれそのまま消えていった。

恐らくは、勘だが遊星のもとに行っただけに違いない。
きつとそうだといいな。

最後に見えた京介の口の動きから、判断する。

あの時私は、馬鹿野郎と言われたのね。

馬鹿でいい。

私は仲間のためなら・・・馬鹿にだってなんにだってなれる。

そう、思いながら・・・私の意識は闇に沈んだ。

七話『闇の戦い 瀬川遊奈VS鬼柳京介 へ後編』(後書き)

遊奈「二回目だわ・・・死ぬの・・・」

まあまあ、ある意味でレアですよ。

こんな早くからこんなに死ぬ主人公は。

遊奈「嬉しくない！ 凧なんて全く死にそうに無いのに、なんでこっちはこんなに死んでるのよ」

凧「呼んだ？」

遊奈「呼んでない！ 帰れ！」

凧「はいはい」

・・・何時の間に乱入する術を・・・(汗)

遊奈「とりあえず京介は無事なのね？」

そうっすよー。

あと今回の君、ご都合主義にも程があるでしょ。

遊奈「うっ、作者のあんたが言うか！」

私はご都合主義ばっちこーいな奴なんで・・・。

遊奈「むかつく！・・・次回、八話『巨人の痣を持つ女』・・・ライディングデュエル、アクセラレーション！」

遊奈「そういえばルドガーの横に居たのって誰？」

ディマクエ・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9478x/>

遊戯王5D's 転生者です、ごきげんよう

2011年11月17日19時29分発行